山の上から

「山の上から」は鈴木先生が横濱高工卒業生間の機關紙「横濱工業會誌」上に連載されてゐられるもので、昭和十一年四月一日發行の同誌第十一卷第四號に第一回を載せられて以來昭和十六年十月三十一日發行の第十六卷第六號を以て四〇回に達してゐる。

その內容は、先生が折にふれ時に臨んで、隨想、追憶等を述べられたもので、回を重ね、號を追ふに從ひ、愈々趣深く興盡きざるものがあり、工業會誌上に偉彩を放つてゐる。

然して其の大部分は茲に再錄したが、紙面其他の關係上一部は後の機會に俟つたものもある。

幸運

山の上からは谷底まで見えるのが定石となつてゐる。六ツ川の丘の上、高からざれども、閑居靜思すれば社會のあらゆる段階を見透すことが出來るのである。然し即今の時勢、徒らに他人の疝氣を頭痛に病むには及ばない。寧ろ自家頭上の蠅を追ふべしである。內省は非常時國民心得の第一課であるべきだと考へる。

內省の妙藥は、回舊であり回顧である。自ら踏み去り踏み來つた人生行路を冷徹に自批自判することである。思ひ出、それは懷しく又憂きものである。回顧する六十餘年、ただ夢のやうでもある。然し眼を掩へば忽ちそこにはおぼろげに點描される幾つかの姿があり、影がある。その一つの影、その一つの姿、思ひ浮ぶまゝに書きつらねるのが、この稿の眼目である。

筆をとつて先づ忘れてならぬことは、彼の大正十二年の大震火災である。九月一日はまだ學校の休暇が明けない時である。然し當時私の日課は每朝常の如く登校して、午前十一時になると、櫻木町驛橫の辨天橋際にあつた橫濱銀行集會所へ行つて晝食を濟して後、午後の幾ときかを過す

のであつた。

當日もその日課を繰返す心算であつたのが、その日に限つて學校に事務上の所要があり、時を費して居る内に遭難したのであつたが身には微傷すら負はなかつた。若し常の如く銀行集會所へ赴いてゐたならば、恐らくはあの瞬間に全潰した煉瓦建の爲に、生命を奪はれたか重傷したか、其の一を選んだであらうことは明かである。

又私はその夏に齒を痛めたので、八月の中頃から、山下町の岩崎齒科醫院に毎日通つてゐた。ところがその岩崎氏が東北地方へ旅行したので、暫く治療を休んでゐた。然し八月末には歸濱したので、九月一日にはどうしても行かねばならぬことになつてゐた。この岩崎氏の醫院は煉瓦の古建物の二階にあつて、同じく震災と同時に倒壞し、同氏始め看護婦等全員壓死したのであつた、若し私が當日治療に行つてゐたならば、所詮は同じ運命を免れることは出來なかつた筈である。私は斯くして二つの生命を完ふし得たのである。

又私は同時に多くの書籍の生命を救ふことが出來たのである。それは開校當時、校務が餘り忙がしくなかつたので、自分の藏書の大部分を學校の居室に移して、閑を利して讀書に費してゐたのである。所が其後漸次暇が無くなり、到底讀書の時間が無いので、その夏休暇の始に書籍全部

を再び磯子の居宅に運び返したのであつた。居宅は一切の災禍を免れたのであつたから、當然書籍の全部は安全であつた。若し不幸にしてそのまゝ、學校に留めて置いたとすれば、私の藏書全部は灰燼に歸してゐた筈である。

然かも私は身の安全が、學校に於て庇護された外に、學校にゐた爲に學校が罹災より、その最後に至るまでを見とゞけ、成し得べき最善の努力を盡して、思ひ殘すところがなかつたのである。斯く考へて來ると、當日の私は飽くまで天佑であり、神の護りを受けてゐたものと考へるより外はない。

好運はまだこゝにとゞまらなかつた。それは私をして、その日學校に留まらしめた校務と言ふのは、その八月三十一日に東京で、新たに購入した自動車の輸送手續であつた。あの交通機關の全滅した際に、一日の差で自動車を手に入れ得たことは、その後學校の復興、横濱市民の利便の爲に、この自動車がどれ位役に立つたかは、想像以上のものであつた。

（幸運は自動車に乘つて）

私は事實そう考へざるを得ないのである。

（幸運吾に在り）

この時の私の自念が其後如何に私を勇氣づけ、明朗化して呉れたことであらう。いや恐らくこれは私の生涯を通じて、生甲斐あらしむる御光であると確く信じてゐる。（一〇・三）

我　意

私の東京帝大卒業式の日にゆくりなくも仙臺第二高等學校校長中川元先生から一通の手紙を受取つた。その文意には、（多分お前は今年卒業が出來ることと信ずる。卒業したら私の處へ來い。）とあつた。私はこの時既に島根縣の濱田中學に赴任の交渉を受けてゐたが、中川先生とは、先生が五高校長時代、私が化學助手として先生の配下にあり、並々ならぬ恩顧を受けて以來の關係にあり、先生の變らざる恩愛を感謝しつゝ、喜んで仙臺へ赴任することに決した。

中川先生は當時第二高校と、仙臺醫專の兩校長を兼ねてゐられたので、私は兩校の講師と言ふことになつた、然し赴任して見ると、私と同じ時期に、私の專攻に類似した科の出身で同時に赴任した者が、教授に任ぜられてゐた。地方の學校などでは、この待遇に對する考は、仲々銳敏であつて、屢々それが物議の禍根となる場合が多いのである。

私の場合も、私自身は極めて無關心であつたが、同僚の多くは交々其職名と且俸給の差別的待遇に對して、このまゝ默視することの不合理さを極力說かれたが、始めは別にこれを意に介するほどのこともなかつた。然し仙臺の冬は長かつた。冬籠りのつれ〴〵なるまゝに、同僚互に訪問し合ふのが習慣であつた。この場合話題の中心はいつも私の待遇問題であつた。その度重なるにつれて、私は心ならずもついその氣になつて、或時中川先生を訪ねたついでに、例の差別待遇の一件を持ち出したのであつた。すると先生は、私の顏をじつと見詰めて「お前でもそんなことを言ふか」とただ一言、そのまゝ口を閉ぢられた。

私はこの瞬間頭から、冷水三斗を浴せられたやうな氣がした。思はずはつと頭が下つたまゝ先生の顏を正視することが出來なかつた。私はこの時以來、自らの待遇問題に就ては再び口にすることを恥としたのであつた。

その後暫くして、本官となり更に二年ほど經つて八級俸となり、そのまゝ三年据置きの後に、廣島高師に轉任を命ぜられ、そこでも三年間同俸給の後、三年間外國留學を命ぜられたが、依然同待遇であつたから、前後を通じて實に九年間、八級俸同一待遇を續けたのであつたが、私は自己の待遇に就ては些かの不平も不滿もなかつた。只日々の職分を自ら樂しんだのである。

三年の外國留學から歸朝して、藏前高工に轉任することゝなつたが、こんな譯で同僚に較べると、私の待遇は非常に惡かつた。そこで校長の手島先生はこれを氣の毒に思はれたのであらう。私の待遇を許す範圍內で矢繼早に昇進せしめられ、六七年の間には全く同僚と伍するに至つた。

この藏前に在る間のことである。應用化學科の一教授の任命に就いて、時の校長阪田貞一博士と、意見の一致を缺いたことがある。私は或時その問題を解決する爲に、阪田博士を訪問して意見を交換したが、私は自ら持するところを容易に讓らなかつた。最後に博士は言はれた。

「それでは君、代つて校長になつて呉れ」

その時の博士の悲痛な面持ちは、理窟なしに私の頭をぐわんと叩き付けた。私は即座に答へた。

「よく分りました」

この一言を最後にして、私はこの問題には未來永劫再び觸れることがなかつた。

私の長い公生涯のうち、遭遇した事件はこの外猶一再に止まらない。又私自身の受けた重大性から言つて、更に大事件のものも決して少くないのである。然し私の受けた感銘から言へば、この二つの事件が、私の生涯を左右するに充分の力のあつたことを否めない。

（我意を徹してはいけない）

この私の處世信條は、全くこの兩校長の與へられた贈物であることを感謝してゐる。

（一一・二）

共　榮

大正二年横濱に電氣工業組合と言ふものが生れて、その委員會が組織され、その委員長には横濱海上の井坂孝氏の前任者であつた土子金四郎氏が推され、委員には原富太郎、中村房次郎、若尾幾造、茂木惣兵衛の諸氏と言つた一粒選りの大實業家を網羅せられたのである。今日横濱市がその一枚看板としてゐる工業立市運動は端をこの邊に發したものとも見られる。

私はこの組合の要務を帶びて、その年急に二度目の歐洲行きをなすことゝなつたのである。抑もこの組合の目的と言ふのは、當時世界の視聽を蒐めつゝあつた空中窒素の固定事業にあつた。私と行を共にし隨員の役目をして呉れる筈の「今津蠅取粉」で有名な今津明君と、茂木合名の黑板英次郎氏は既に先發し、私は其後を追つて單身西伯利亞鐵道により、獨逸に入つたのであつた。

一體この窒素固定事業の起りは、諸國に於て、空中の窒素を硝酸に變じ、更にこれを硝酸石灰

に變じ、これを諾威硝石と言ふ名で市場に出し有名となつたので、横濱の組合もこの製造を目指した譯であつた。然るに私が獨逸へ行つて見ると、新たに佛國の窒化アルミニューム法と、獨逸のハーバーの合成法が擡頭してゐた。當時私は泌々化學の消長が全く三日見ぬ間の櫻であるとの感を深くした次第である。

そこで私は當初の豫定を變更して、諾威硝石への關心を一擲し、主力を獨佛兩法に傾注し、この兩法の權利主體と種々折衝して、緊密な連繫を保つことに成功した。ところが恰度その時、東京に於て財界の大御所である澁澤榮一子を始め大川、平田、淺野諸氏の錚々たる巨頭が、同じ目的の下に一團となり、世界的化學者高峯讓吉博士を全權とし、近藤會次郎博士を隨員として、同じく西伯利亞線を經て獨逸に入つた。私はこの情報を知つてゐたので、豫め充分の工作を施して置いた。

高峯博士等は、私の工作に妨げられて、容易に目的を果し得ないので、轉じて私への交渉となり、人を介して會見を申込まれたが、私は容易にそれを承けなかつた。そこで博士は策盡きて獨逸を去り巴里に赴いた。そこで巴里に居た私の隨員の一人である今津氏を說得して、同氏からも極力私を勸誘したが、斷然私はそれを斥けたのである。然し最後に高峯博士自身で直接私に會見を

懇望さるゝに至つて、私は我國化學の大先輩に對する敬意として之を承諾した。

勿論會見前より其の內容は横濱東京の合同問題であることも、又合同の結果私の採るべき處置も自ら明かであつた。私は異常な決心の下に巴里に赴き、豪華なホテルマゼスチツクに一週間宿泊の間に、高峯博士と屢々會合して折衝を交へた末に、合同契約書に調印し終ると、其の翌日急遽巴里を引揚げて一路歸朝の途に着いた。

私はこの契約書に於て全部私の提案を承認せしめ、斷乎として横濱側の有利な立場を作つたのであつた。私は此の事を以て最後の努力とし、この事業から一切自分を清算し、後事をあげて高峯博士に委託することに內心深く決意したのである。

然るに外國側と事業繼承の交渉成立した後、東京側は高峯鈴木の契約書が自己側に餘りにも不利なるところから、該契約書の承認を拒むに至つた。私は其不當を鳴らし、東京側の委員長澁澤子爵に長時間に亘つて意見を開陳し東京側の不德を難詰した。

私は當時甚だ心平かならず、少なからず昂奮したのであつたが、心頭を轉じて冷靜に返つて見ると、抑も斯かる片務的又壓倒的有利なる契約を强要したのが自分の間違ひであつたことが分つて來た。世の中はもちつもたれつであり、飽くまで共存共榮であるべきが故に。（一一・四）

心構へ

支那は今や全力を擧げて、其得意とする逆宣傳を全世界に放送しつゝある。これに對し我國でも、正當な立場を擁護する爲に、適當な使節を派遣することゝなり、この五日勢揃ひの上、首相官邸で送別の宴が張られた。

洵に結構なことであり、人選も適材適所である。只だ私の些か不滿を感ずることは、この人選があつたのは、確か九月の初旬である。そうして一ヶ月後にやつと勢揃ひをなし、二週間の後に悠々出掛けて行くと言ふのは、一體どうした譯であらう。

勿論重大な使命のことであるから、夫々準備のゐることであらうとは想像するが、問題の極度に逼迫した今日、一ヶ月半も準備に費すと言ふことは、餘に餘裕があり過ぎるやうな氣がする。然かも相手の支那の宣傳使は、自國から飛行機で直接目的國へ、とうの昔飛び出してゐるではないか。事苟くも一國を代表して、重大使命を擔ふと言ふ人々である。使節としての交渉を受けた瞬間に、既にその使命に對する心構へがあるべきである。又その手段方法もちやんと胸三寸に疊

込まれてゐる筈である。

政府の命令があれば、任命の瞬間に鞄一つ持つて出掛けても、充分その大任は果せる譯である。若しそれ丈けの自信がなく、何かと調査準備をしなければ、物の役に立たない人では、例へ一ヶ月はおろか一年二年準備したところで、決して間に合ふ人物ではない筈だ。然し既に一ヶ月半は經過した。もう後の祭である。私はこの上はただ使節の方々が、戰場に在る勇士と同じ心構へで、國家の爲に奮鬪努力、充分の成果をあげられんことを熱望する。

こゝで一寸蛇足を加へて置きたいことは、諸君が今後世に處する上に於て、或は官命により、或は社命により、極めて急速の出張を必要とする場合が多々あることゝ考へる。斯かる場合に於ては、諸君はその即日否即刻でも出發し得る心構へが常々必要である。

私はその一つの教訓として、親友故古谷久綱君の名を擧げねばならぬ。古谷君は伊藤博文公の名秘書として、公が兇彈に倒られるまで常に其左右にあり、公の歿後は政界に入り政友會の總務となり、前途を囑望せられたが、幾多の春秋を殘して、中道惜むべし病歿せられた。

古谷君がこの出世双六の振出しは、京都同志社を卒業して、鄉里愛媛縣に歸り農業に從事してゐたが、志を立てゝ操觚界に入らんとし、同志社の先輩國民新聞社長德富蘇峯先生に就職を依賴

した。

蘇峯先生は、いづれ缺員のあり次第採用する旨を答へたが、時恰かも日清の風雲急を告げ遂に戰端を開いたので、同君は蘇峯先生の招電に接するや、即時鄕里を出發して上京した。上京出社すると直ぐ廣島通信員を命ぜられた。古谷君は又即時廣島へ出發せんとした。社では旅費その他の準備もあり、兩三日滯京せよとのことであつたが、古谷君は旅費なら自分に持合せがあると言つて其儘廣島へ向つた。

古谷君は廣島で大いに手腕を發揮し、認められて戰後北京の通信員に特派され、國民紙上に斷然異彩を放つたのである。これが緒口となつて彼の榮達が始まつたのである。この古谷君の心構へこそ、前途ある青年諸君のもつて範とすべきであると考へるのである。（一二・一〇）

早春偶語

思ひ出の盡きない母校二十年の過去を顧ると、電飾燈の如く明滅するめまぐるしい瞬時にさへ、幾つかの鮮かな色と形の印象がよみがへつて來るのである。これがつまり歷史のやまである。劇

で言へばクライマックスである。私の短かい人生史のうちに刻まれた一つのやまは、私が母校に殘した海外發展の願望である。

母校の校章は波に高工を意匠されてゐる。この波は決して横濱の濱を具現したものではない。私の意圖は波と波頭に四面を圍まれた我高工が、この波を乘り越へて大陸の彼岸に大きい足跡を印すことであつた。この私の意圖は大正十四年更に强調されて、大陸會の創立を見るに至つたのである。

私は一面海外發展を策すると共に、他方我日本精神發揚の急務なるを痛感してゐた。それは一國の發展は建國精神の消長に關し、建國精神のない海外發展は害あるも益なきものだ、と信じたからであつた。この立場から昭和二年軍事教練實施の機會を逸せず、相策應して其透徹に努めようと細心の注意を拂つたのであつた。當時私はこれに關し特に聲明を發表して、其向ふところを明かにしたのである。私どものこの企圖は幸にして、世の容るゝところとなり、爾來母校の軍事教練は、確乎不退轉の優位を占め來つたのである。

又それと反對の例ではあるが、矢張り私の信ずるところを斷行した一つの例證は、世界大戰後に結ばれた國際聯盟に關する一つの出來事である。

當時世界の思想界は一切を擧げて國際聯盟に隨喜渴仰したものである。我國にもこの風潮は遠慮なく侵入し來り、この横濱でも國際聯盟の支部を設立するに至つたのである。その當初母校にも相談勸誘のあつたのは勿論であつたが、私は自ら奉ずる主義と信念の上から、これに加盟することを退けたものであつた。

更に過ぐる滿洲事變の勃發するや、母校は敢然率先して學生慰問使を特派し、現地慰問と同時に第一線の實情を見學して歸校し、市内各所に其報告講演會を開會したのであつた。今次事變ではこの慰問使の企は敢て奇とするに足らないのであるが、當時に於ける母校の擧は正に一世を指導するに足るものであつた。

斯く母校と國家的大事の相關性に就ては、常に意を傾け相當程度の効果を擧げ來つたものであると自ら信じ、同時にそのなし來つたことが、決して徒勞でなかつたことを自ら疑はないのである。

然して今や既に二十歲の春秋は去つた。二千數百の卒業生を送つた。そして今次の事變に當つて多數の應召者を出し、或は第一線に或は後方軍務に活躍しつゝあるのである。之等の應召者は定めて過去母校に於ける敎養によつて、義勇奉公の精神にまれ一死報國の氣魄にまれ、決して人

後に落つるものでないことを固く〳〵信じてゐる。

戰局は首都南京の陷落によつて一轉して所謂國民政府を相手とせざることゝなり、支那全土に亙つて、其主要都市は殆んど我軍によつて占據される迄になつた。國家の爲、皇軍の爲、洵に慶賀に堪へない次第である。

然しながら一方支那軍閥は遠く奥地に遁入して、其政權を各地に分散し長期抵抗の態勢を執るに至つたのである。果して蔣一味が軍政經濟其他の內部的狀勢から宣傳の通りに事を運び得るかどうかは第一に疑問であるが、それにしても兎に角外國の援助を受けつゝ奥地の地形を賴みとして、抵抗を續けるであらうことは、現實の問題として認めなければならぬ。

この相手とせざる政權の動きに對して、我政府は先づ全國民の物心兩面に總動員を敢行し、長期對戰の決意を固めてゐることは周知の事實である。この秋、この場合銃後の全國民は如何なる覺悟と決心を必要とするか、これは最も大切な問題である。

この場合或者は戰局今や一段落なりとして、緊張に些かの緩みを見せやうとしてゐる。又或者は蔣政權の內部的崩壞を期待し、或は共產、或は相剋の惡化を賴み、或は外國の支援が阻絕されるであらうことを以て、事變が自ら解決せらるゝ機會を窃かに期してゐる。

これ等はいづれも所謂他力本願であつて、人の褌で相撲をとらうと言ふ、極めて虫の良い注文である。然し今次事變の如き深刻にして眞劍な問題が斯かる他力本願によつて大詰めの幕が下されると思つたなら、それこそ認識不足も甚しいと言はねばならない。

自ら蒔いた種は自ら刈らねばならぬ。今次事變處理に當つても他力にあらずして自力によるの他はないのである。この自力本願を發揮するには第一に意力の旺盛なることを必要とする。全國民が其意力を旺盛ならしめ少くも事變當初の如き意力を發揮して、所謂千萬人と雖も吾往かんの慨を示し得たならば、前途に横たはる幾難關亦何物ぞと言ひ得るのである。

私は曾て田中文相が母校を視察せられ、特に分列式を閲せられた時に、一詩を賦して文相に贈つたのであつたが、その一句に

風雲他日悉英雄

と書して置いた。この句の風雲は即ち今日の事態そのものである。この風雲の裡にあつて、直接第一線に活躍する諸君は即英雄であり、又第一線に立つの機會を得なかつた諸君もこの風雲に乘つて悉く國家の英雄たらんとする意力を熾烈ならしめ、共に國家の大事に際會して御奉公申し上げたいものと熱願してやまないものである。

（一三・一二）

春宵偶語

學問も宗教も同じである。門に入るべしであるが、又同時にその門を出ることをも忘れてはならない。一度は凝るほどに、熱するほどに、道を學ぶべきではある。然しいつまでもその同じ道を往つたり來たり堂々めぐりを繰返してゐたのでは、とうてい偉い人間になれつこはない。一通り道を歩いたなら、出口を探して拔け出さねばならない。

垢拔けのした人間といふのはこんな種類の人間のことである。ところがどうも世の中には垢のついたまゝ一向その垢を落さうともしない者が多いやうである。これは世の中を餘り見ないで暮す技術家などには殊に多いやうである。技術家が容易に支配者階級の位置につき得ないのもこゝらに大きい原因が、伏在してゐるやうに考へられる。

孔子が偉い、孟子が偉い、莊子が偉いと言つても、それは全面的の偉さでは決してない。確かに偉いところもあり、その偉いところの幅が常人より廣いであらうこともうなづかれる。然しその偉いところにのみ眩惑されて、それを全人格的の偉さだと誤認し盲目的の信仰を拂ふところに

禍根は生ずるのである。

信ずべきところ、信ずべからざるところのけじめをよく見分けてそこに自らのとるべき道を選び求めて進むべきである。一度飛び込んだが最後、眼が見えなくなつて了ふやうでは、學問も宗教も反つて甚だ厄介なものである。

ところでその道に於て拔けると言ふには、矢張り飛び込む前に相當の準備が必要である。飛び込んでから道を探すやうでは致し方がない。然らばその準備はどうすればよいかと言ふ問題であるが、これを學問の場合に就いて考へて見ると、今日の樣に洋學萬能の時代には、漢學を學ぶことが最善最良の方法であると私は信じてゐる。

手前味噌のやうであるが、暫く私自身の場合をお話して見たい。私は十三の年に漢學の塾にやられた。そこでは孟子とか論語の素讀をやらされたのであつたが、私はそれが厭で厭で仕方がなかつた。同年輩で小學校へ入學して居る者は、地理とか歷史とか面白さうな勉强をしてゐることを考へると、意味の判らない漢文の素讀位凡そ退屈なものはなかつたのも無理はない。そこで私は色々と口實を設けて、遂に居ること半歲でその塾を退いて了つた。

そうして今度は逆轉して、洋學を同志社に學んだのである。私はそこで洋學に凝つたのである。

其結果今日の思想から考へると、まあ桃色位の色がついたやうにも考へられる。然し幸なことには、私は二十五・六歳で教育界に入つたので、直ぐ自分の考の間違つてゐることをさとり、さとると同時に昔なつかしい漢學に戻つた。

そうして再び漢書を耽讀して、心が平らかになると同時に、著しく右翼的思想に轉換して行つた。私はこの時になつて過ぐる漢學塾の半歳が、實に有意義であつたことを痛感した。そうして恩師尾崎山人先生の面影を思ひ浮べて思慕に堪へないものがあつた。

今日の學界や政界を見渡すと、洋學一本槍の人々はどうも面白くない人物が多いやうであるが、漢學の素養を持つた人々には尊敬すべき人物が多いのは正しき事實である。これをまた遡つて考へて見ると德川幕府時代に三人の學者があつた。幕府の御用學者としてまづ林羅山がある。羅山は少より心を著作に注いで、老ゆるも衰へずその撰著編纂するもの一百七十種の外に、羅山文集一百五十卷と言ふ大業績を遺した人であつた。

また同じ幕府のお抱へ學者の荻生徂徠は、赤穗四十七士の斷罪を主張して有名な人である。兩者共學者として實に立派な人物ではあるが、然し後世人心に遺した所は大したものではない。

これに反し身は巷間の一學究ではあつたが、上臺閣の公卿諸侯から下布衣の士に至るまで、其

門に入るもの無慮數千人と言ふ、廣大無邊な勢力を持つてゐた山崎闇齋の存在は果して何を物語るものであらう。

一體御用學者とかお抱へ學者とか言ふ者には、その御用その抱へに凝り固まつて洵に融通の利かぬ死學をしてゐる者の多いのは、今も昔も變りのないことである。これを德川時代の三學者の上に考察して見ると、羅山、徂徠の徒は所謂象牙の塔に立籠つて詩文を弄び、儒敎聖典の文字上の詮議に沒頭して、反つてその中に含まれた精神に觸れることが出來なかつた。然るに闇齋に至つては一學其精神を突いて、これを解剖批判した。

そこに活學があつた。彼は儒敎の底にひそむ革命思想を指摘して、我國體と相容れざることを論難した。即ち國體明徵の元祖は實に闇齋であつたのである。國體明徵は今に始まつたのではない。ただ昔は儒敎を盲信した人々に發せられた警告であり、今日は洋學を盲信する人々に發せられた警告である點に相違を見るのみである。

私は結論として再び、洋學過信、洋學盲信の結果、我日本民族の美點を忘れるやうな人々に、是非國學と漢學の素養を積むべきことを進言し、即刻その實行を熱望するものである。

（一三・三）

皇道精神

(一)

この程のことである。安達謙藏氏から本牧の八聖殿で何か話をするやうにとのことであつた。安達氏にはこちらから講演などを賴んだ關係もあり、義理もあることであるから何か話をすることに約束をした。演題に就ていろ〳〵と考へた末に論旨を纏めてその表題を「非常時に直面する皇道精神」と言ふことにした。

その時に私の話した要領を爰でまた話して見たいと思ふのである。問題が問題であり、時が時であるからこれは幾度繰返してもいゝ問題であるからである。勿論私はこの方面には專門外であり、別に大した研究をした譯ではないのであつて、ただ極めて常識的に日頃私の抱懷するところを申し述べて見たいのである。

一體皇道精神と言ふ言葉が特に高調されたのは、極く近時のことであるが、その精神は勿論今始まつたことではない。我國開闢以來、炳乎として又嚴乎として存在してゐるものである。それ

は太陽が萬古不絶我國土を照してゐるのと同じである。我皇道精神は實に萬古不絶我大和民族の脈膊のうちに躍動し來り、躍動しつゝ又躍動を續けるものである。然し過去の歴史に於ては、時に浮雲天を掩ひ、天日爲に遮らるゝことがなかつたとは言へない。

併しながらこれを世界の國々に較べて見ると、我日本帝國の如き光輝ある歴史を有するものは決して二つとは見出し得ないのである。

支那と我國とは勿論根本的に國體そのものを異にしてゐる。只だ儒教を介して類似點があり、又儒教により我國の受けた影響は、決して尠しとしないのである。從つてこの儒教の本質を明かにすることは、皇道精神を明かにするに重大な役割を持つものと言はねばならぬ。

支那の歴史によると周の武王は其君である殷の紂王に代つて天子の位についたのであるが、武王が紂王を討たんとする門出に當り、伯夷叔齊は、武王を諫し

「父死して葬らず爰に干戈に及ぶ、孝と言ふべけんや、臣にして君を誅す、忠と言ふべけんや」

と言つた。武王の左右の兵は伯夷を制しようとした。武王はそれを止めて

「義士なり」

と言つて伯夷を去らしめた。そこで伯夷は首陽山に入つて『周の粟を食まず』と言つて蕨を採

つて食ひ、遂に餓死したと言ふのは有名な史實である。

紂王は暴君ではあつた。武王が叛いたのも、洵に餘儀ない行爲であつたかも知れないのであるが、然し事情や理窟は兎も角として、臣たるものが君を誅したことは間違ひのない事實である。この事實に對して、儒教の太宗たる孔子はどう解釋をしてゐるかと言ふと

「順天應人の行爲なり」

と言つてゐる。

この許す可からざる反逆が天に順じ人に應じたものであると孔子は言つてゐるのである。換言するとこの武王のなした革命が孔子によつて立派に是認されてゐるのである。

この事例は實に儒教の根底を流れる思想であり、支那民族の民族性を物語るに充分なものであると考へる。それと同時に我皇道精神と帝國國民性と對比して全く相容れない思想なのである。この儒教が我國に傳來したのは、應神天皇の御代であるから、今年で千六百五十四年になる譯である。

我國體は申すも畏き萬世一系の天皇が皇祖皇宗の神勅を奉じて、我國家を無窮に治め給ふ所にあり永久不變の神國なのである。この有難い國體が嚴として存在してゐたればこそ、この革命思

想を盛つた儒教が、我國に深く浸潤し來つても我國體は微動すら與へられなかつたのである。否かへつてこの儒教や佛教の教義は、我國體を強化するの具にされたのである。それは聖德太子の十七ヶ條憲法を見ると充分うなづかれ得るのである。

我國に於ける儒教の跡を見ると大化の改革後一層振興された。それは支那に三十年も留學したと言ふ南淵と言ふ學者が、仲大兄皇子や中臣鎌足に近づいて建策し、遂に大化の改革を行ふに至つたからである。後平安朝や奈良朝に至つて遣唐留學生が盛に支那に渡り、漢學の隆昌は一世を壓する觀があつたのであつた。其後我文化史に大きい足跡を殘した吉備眞備は、唐に二十年間も留學して歸朝し位大臣に昇つた。其當時の朝廷には特に逸材が多かつたやうであつたが、僧道鏡の横暴をどうすることも出來なかつたのはどうしたことであらうか。只だ獨り和氣清麿の存在するあり、一語以て道鏡の逆意を阻止し得たのである。當時の逸材は支那カブレのハイカラであつた樣である。

この清麿から五百五十年の後に楠正成が出現してゐる。正成の出現は清麿のそれの如く、我民族的皇道精神の發露であることは言ふまでもない事であるが、又他面には、儒學の影響を受けたであらう事も見遁し得ない事實である。

支那に於ける儒學のうちでも、特に宋の時代には最も多くの有名な學者を輩出し、帝王の資格が論爭の的となつた。そのうちで蘇東坡の正純論と言ふのがある、これは唐宋八家文の中に出てゐる。我國の時代で言ふと源平時代に當る時である。

東坡は帝王の資格として德望、功績、實力とこの三つを必須の要件だとしてゐる。これは歷史的に檢討した結論であるが、司馬溫公の資治通鑑はこの東坡の思想を承けて著したものである。宋の初代帝王趙氏は德望の人であり、又實力の人であつた。故に五代に亘る亂後周の天子より正統に位を讓られた所謂正統の帝王でありとされたのであつた。これが即ち北宋時代である。

然し宋は其後北方の勢力に壓迫されて、南方に難を避けたのである。故に史家はその後の宋を指して南宋と言つてゐる。朱子はこの南宋に屬する人であり、所謂朱子學の開祖である。朱子は帝王の資格に就て、德と功と力の三つの上に更に血統の一つを附加した。

又この南宋時代末期の學者であり、天晴忠臣義士として支那歷史上に燦然たる光彩を放つてゐる文天祥や陸秀天、張世傑などは元に屈せず祖國の爲に惡戰苦鬪を繰返し、史上稀に見る慘禍を生んだのであつた。彼等は全く宋學の感化を受けたものと斷ぜざるを得ない。

これによつて宋學即ち朱子學が支那の國體、並に國民に如何に重大な影響を及ぼしたかは充分

窺知し得られるところである。この朱子の後裔である舜水は明の滅亡に瀕するや、救を求めて我國に渡來したものであつた。宋學が我國に傳來したのは鎌倉時代のことである。それから五十年の後に　後醍醐天皇の御代となり、彼の建武中興の偉業が企てられたのである。

後醍醐天皇は、宋學を御研究遊されたし、又この偉業に參與した人々は僧玄惠を始め朱子を學んだ者が多かつたのである。　後醍醐天皇の靈夢によつて楠正成が現れ、七度人間と生れ更つて賊を滅さんと、忠烈千古不磨の遺言により湊川に華々しく散つたのであるが、其子孫は天子を奉じて吉野に據り三朝五十年の長きに亘つて、一族一門と共に肝血を傾け盡しつゝ終始南朝正統の天子を護り奉つたのであつた。

賴山陽は當時を論じて、世道人心を千古の下に維持するものだと言つてゐる通り、正成一族の史實は洵に我皇道精神の極致であるが、この精神は朱子の正統論や文天祥の忠節に多分に感化を受けたものと見るべき節が尠くないのである。

又楠氏の據る吉野は、當時の足利尊氏の武力を以てすれば、これを攻略することは難事ではなかつたかも知れぬ。然し敢て尊氏がそれを決行しなかつたのは、それによつて天下に潛在する勤王の士を刺戟し、事を構へることを避けたものであらう。　後醍醐天皇の崩御遊ばさるゝや嵯峨

に天龍寺を建立し、御冥福を祈つたのも一つは同じ心からではあるまいかと思はれる。

建武中興の偉業は中道にして挫折したが、歴史の上には劃時代的の業蹟を印されたのであつた。そうして續くものは封建時代であり、儒學は單に讀書や詩文の具と化したのであつた。次で來つたものは德川幕府である。德川幕府と儒學は更に如何なる動きを見せたであらう。更に私は筆を洗ひ、稿を更めて信ずるところに論及したいと思ふ。

（一三・四）

（二）

非常時に直面して、私は特に皇道精神に就て所懷を述ぶるに當り、前回に於て德川幕府に至る迄の我國の思想體系に就て累說したのであつた。さて德川家康が天下の權を握るや、文治を以て政道の大本とした。即ち藤原惺窩や林羅山などの朱子學者を招いて、朱子の學を講ぜしめた。この結果德川幕府三百年間にあつては、著名の學者が簇出するの盛觀を呈した。恰もそれは宋の三百年間を偲ばしむるものがあつた。

この家康の出現したのは、彼の建武中興を去ること二百五十年の後であつた、儒學の本體を摑むことなく、ただ太平時の文化だとのみ考へて、儒學が幕府に迫る危險思想であることには、毫末も考へ及ばなかつたのであらうと考へる。何故なれば儒學は宋に於て、宋の帝室を擁護する思

想であつたのであるから、これを我國に移し考へると、反幕府であり、我皇室擁護の思想となるべきは當然の道であつたからである。

その現れの一つは水戸光圀の皇道精神の高唱である。光圀の言行が明の亡命客朱舜水と一脈相通ずるものがあつたことは周知のことであるが、朱舜水と光圀が肝膽相照すに至つた經路は、初め朱舜水が亡命して、長崎に來つた時、柳川藩士安藤省庵が、自らの食錄の半ばを割いて朱舜水に與へてこれを遇した時からであつた。

この時省庵は朱舜水に自著楠公傳を示した。楠公の誠忠と朱舜水が明に誠忠を致し遂に亡命するに至つた境地とは、彼我相通ずるものがあつたので朱舜水は非常に感激して直に筆を採り楠氏頌忠の一文を草した。それが今湊川に建つ嗚呼忠臣楠氏之墓と碑面に刻まれた撰文なのである。この撰文は碑を建てる爲に書いたものではなく全く楠公傳を讀んだ即感詩なのであつた。

話は少し岐路に入つたが、兎に角德川幕府の奬學策は、自ら蒔いた種ではあつたが、その收穫は全く思ひ設けぬ實を結ぶことゝなつた。これは餘りに奬學の藥が利き過ぎて、多數の學者が出て、色々の研究をしてゐる中に、儒學そのものゝ批判、檢討をするやうになつたからである。

儒學者のうちでも一脈の人々は、我國本を體して、國學者と相提携し儒學と皇道精神の協調を

策し、其異同を明かにして、同じきをとり、異なるを避けることゝなつた。即ち儒教中に含まれる革命精神を排撃して、我國體の嚴守確立を叫んだのである。

その一人は熊澤蕃山である。蕃山は、三種の神器を以て我國の神書なりと言つた。これは我上古には文字がなかつたので、知と仁と勇を三種の象によつて示したものである。即ち玉の溫潤にして光明なるを以て仁となし、鏡の靈明にして能く善惡を分つを以て知となし、劍の剛にして斷ずるを以て勇とした。又支那の聖人、日本の神人其德一にして其道又不二なりと言つてゐる。

この我神人神道は、日本の水土によつて成つたものである。故にこれは支那へ貸すことの出來るものではない。同樣に儒教は支那の水土によつて成つたものであるから、これは他國が借りることは出來ない譯のものである。お互にその水土で出來たものは出來る理由と出來たものに特異性がある。であるからそれをそのまゝ貸し借りは出來ないのが當然である。これをもう少し現代語で判り易く言ふと、各民族には獨自の民族性が嚴存する、その民族性を無視して相互の民族道を融和し合ふと言ふことは出來るものではない。ただ兩民族間に相融通し得るものは、文字、理學、器物であると言ふのが蕃山の主張であつた。

この蕃山と同じ時代に山鹿素行があつた。又山崎闇齋があつた。更に闇齋の弟子淺見絅齋、佐

藤直方が出で、下つて竹內式部、山縣大貳、賴山陽等の出現によつて、勤王精神は脈々として一大體系を形成し、大地に力强く根を張つて、軈て來るべき時代を待つことゝなつた。

斯く勤王精神は、逐次深刻化し來つたのであるが、德川幕府の末葉に至つてはこれが尊王倒幕の思想にまで進展したのである。時に我國は鎖國主義をとりつゝあつたが、國外よりする外國の勢力は漸次我國に壓迫感を與へ來つたので之等の形勢より勤王攘夷論、倒幕論、公武一體論等が隨所に蜂起し、恰かも鼎の沸くが如き混亂狀態を現出したのである。その結果は陰謀あり、暗殺あり、襲擊あり、流言あり、蜚語あり、事態は全く收拾し得ぬのではないかと思はれるに至つた。

この混亂時代は軈て整理時代に入り、落付いたところが明治維新即ち王政復古であつた。こゝで我國は再び神武天皇建業の昔に還り、我國土は安泰を取戻した譯である。それにつけても泌々考へられるのは、斯かる混亂時代に當つても、我國は炳乎として抑ぐべき皇祖皇宗の御靈が、國民の歸趨すべき途を示し賜はつた、有難い國柄だと言ふことである。

人が眞の危難に直面した場合は必ず本能的に兩親を呼ぶものである。國民として眞に危難に直面した場合、呼ぶことを許される國の兩親即ち申すも長き皇祖皇宗を戴き得てゐることは、實に我等國民は幸福であると言はねばならない。

國として最も不安と不幸の裡にある今日の西班牙はどうであらう。又ソビエットの現狀はどうであらう。彼等國民の不幸中の不幸は、斯る場合にも國民として其名を呼ぶべき兩親を持たぬことである。彼等はその不安をその不幸を誰に訴へ、誰に語らん術もないのである。

我國は天下の大權が所謂覇府に歸してから六百年の後、再び天皇親政の下に置かれたのである。そうして議會政治が生れたのであるが、この議會政治と雖も、若し言はれるが如く議會中心と言ふ行き過ぎた結果を招いたならば、それは恰かも、幕府の奉還した政權を、今度は再び民衆の名に於て轉與すると同じ結果となることを保し難いのである。

これは伯夷叔齊の所謂暴を以て暴に更へ其非を知らざるものであつて、明治維新の意義に反し明かに皇道精神を滅するものと言はねばならない。

即ちこれを近代の我歴史に見ても、天皇の大權が干犯せられたかの疑雲の生じた場合は、必ず時の政治は安定せず、國民に動搖の色が起つてゐる。これは大和民族としてその事態には決して承服の出來ないと言ふ血潮の高鳴りが自然さういふ結果に導くものである。これは理論でもなければ、運動でもない。ただどこからともなくさう言つた氣運が擡頭し來るのである。

これこそは我皇道精神であり、皇室中心精神なのである。この精神が發して大和魂となり、又

武士道となるものであつて、この魂と道は總てを犧牲にして內は　天皇を護り奉り、外敵を禦ぐにある。この二つの任務こそ我國民の最大の責務であり、又最高の道德である。

この二大任務を國民的に代表した者が即ち楠正成であり、兒島高德であり、名和長年であり、菊池武光である。

又この最高道德であり、最大の責務が發して今次の支那事變ともなつたのである。然し又考へると支那の儒敎と我皇道精神は一脈相通するものがあり、殊に儒敎が我皇道精神を强化するの結果を生んだことは事實である。

曾ては今事變の如く日淸戰爭によつて兩國相爭ふたのであるが、戰終ると、過を改むるに憚る勿れの敎によつて、支那は我國に支援を求め自國內の改革を企てたのである。

然るにその後孫逸仙によつて唱へられた支那革命が、漸次成功するに至るや態度を一變して抗日、反日、侮日と逐次露骨なる手段を弄するに至つたのである。その結果が事變にまで發展したことはなんと言つても兩國の爲、悲しむべきことである。然らばこの悲しむべき事件の對照である支那及支那人を靜かに觀ると、これはどうしても、過去の支那及び支那人だとは考へられないのである。

第一に今日の中華民國の開祖である孫逸仙は既に其素質に於いて、又其血統に於いても、所謂支那人ではないのである。彼は漢學の素養をもつてゐないし、その血統は南蕃人である。又彼と行動を共にした多くの者も彼と同じ種類の人物であつた。否彼等一統のみではない。恐らくその後繼者を以て任ずる蔣介石にもこの漢學的素養はないのである。今日は反つて我國にその素養ある者が多く、松井將軍の陣中賦詩の如き猶武弁にしてこの心得あるのである。

幽燕非故國　長嘯還遼東
回頭看烽火　中原落照紅

とは肅親王が清朝沒落に當つて北京を脱出して旅順に難を避けられた時の詩である。これだけの餘裕と心構へのある者が果して今日の支那に見出し得るであらうか。

成程孫逸仙には三民主義があつた。然してこれは支那本來のものではなくて、英米民主々義からの借り物である。他國、他民族から借り得べからざるものを借りて來た無理算段であつたのである。この借り物で支那四億の民衆を救ふと言ふのであるから、その結果は初めから判り切つたことであつた。

即ち彼等は支那をして內面的に精神的に英米化せしむることに目標を置いたのである。今日支

那が歐米依存の結果を招致したのは寧ろ當然の成行きであつたのである。我國は隣邦支那の保全を以て重大な樞軸としたのであつた。その爲には歐米の支那國土占據を極力拒否し續けて來たのであつたが、不幸にして彼等の非行によつて覆面的の占據を見るに至つたのである。

これは我國として許すべからざるところであり、勿論對岸の火災視し得ざるところである。我國は今や皇軍を動かして、長期聖戰の途上にあるのである。

神武建國の御詔勅に、「六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて以て宇となさん。」とある。

即ちこの御神勅を奉じ我最高の道德の下に、最大の責務を果さん爲には、戰線にある者も又銃後にある者も共々一心一體となつて盡忠報國の精神を振起し、皇運を扶翼し奉らんことを勉めなければならぬのである。

（一三・五）

工學博士 下村孝太郎先生を偲ぶ

恩師であり、就中私の一生を決定的なものに導いて戴いた、工學博士下村孝太郎先生が逝かれて、この秋十月はその一週忌に當つた。恩顧を受けた門下生が集つて京都に記念の會合を催すこと

丶なつた。私は地の遠隔なところから追悼文を需められたので、頃日先生に對する思慕と感激を綴つて先生の靈前に棒げた。

この機會に先生に就て一二の思ひ出を語つてみたい。先生は熊本の產、長じて有名な熊本洋學校に學んだ。在學中に不幸同校は廢校となり、先生等は相率ひて笈を負つて、京都同志社に學ぶこと丶なつた。この一黨には後年名聲をはせた海老名彈正、浮田和民、市原盛宏、宮川繼輝、金森通倫等諸先生があつた。

當時同志社は創設早々であり、未だその存在は脆弱なものであつた。その折も折とて、先生等一黨の同志社入りは補强工作として少なからず役立つたのである。その後同志社は向上の一途にあり、私の入學した明治十九年は在學生徒數、既に六七百名を算するに至つてゐた。

この學校の生徒は殆んど全部が寄宿舍に收容せられてゐて、私學としては一大勢力をなしてゐた。私の入學した時は先生は恰度米國留學中であつた。先生はジョンホップキンス大學で、當時世界的化學者として盛名のあつたレムゼン教授に師事して化學を學んだのであつた。同志者の留學生と言へば傳統の宗教哲學の研究であるべきだが、その型を破つて自然化學を修められたと言ふことは私の憧憬と待望を動かすに充分であつた。

間もなく先生は歸朝せられたので、一日私は親しく先生の門を叩いて、色々其新智識の諸相に接することが出來たのである。先生は白哲小軀であつたが、その話振りに何んとも言へない、吸引力を備へてゐられた。私は既にして一種の陶醉を感じたのである。加ふるに私本來の目的は同志社にあつて、宗教・哲學・文學を學ばんとするものではなかつたのである。

實を言へば私の目的は他にあつた。それは私の生地四國の別子銅山に近いので、自然この銅山やその經營者住友、又はそれを支配する大人物廣瀨宰平翁に非常な魅力を感じてゐたのである。殊に廣瀨翁に對しては、同志社に學んで間もなく翁を訪問するの機會を得、又翁から親しく書狀を戴いたなどした關係から、どうかして自分も鑛山に關する勉强をしたいものだと考へるに至つたのである。

下村先生の訪問も、この私の素志を果すべき何等かの端緒を得たい、と言ふ熱願が籠つてゐたのである。ところが先生のお話を伺つてゐると、化學と採鑛冶金は直接の關係のないことが分つて來て、私は少なからず希望を失つたのである。そこでこの上はどうしても東京帝大に入學するより外はないと思つた。然しその入學はどうすればいゝか、又どんな資格が要求せられるか全く五里霧中であつた。大阪に豫備校があるとも聽いたが、それとてどんなものか一向手懸りになる

ものはなかつた。

そうしてゐる内に下村先生から化學に就いての色々な話を聞いてゐると、化學は一般製造工業に關聯があり、鑛業のうち冶金とは非常に密接な關係のあることが判つて來た。そうして先生の口から、近く同志社内へ理科學校を開設せられることを聞いた。そこで私は迷つたのである。事情も土地も全く不案内な帝大を志さんか、このまゝ同志社に留まつて安全を期せんか、熟慮の結果私は意を決してこの理科學校に志したのである。

然し當時化學に對する認識はまだ極めて幼稚なもので、折角學校は開校されたが志望者は僅か四名のみであつた。しかもその入學資格は、普通科の四年でも五年でもいゝと言ふのであつた。私は四年修了と同時に、この理科學校最初の學生として入學したのである。先生の化學に對する熱愛と生徒數の少なかつたことが幸して、先生の教授は實に至れり盡せりの懇切を極めたものであつた。私達は實に愉快な學窓生活を送つた。

先生は單に學校に於てだけでなく、家庭に於ても私達の先生であつた。私達は先生の家庭に常に出入した。殊に毎週先生の宅で沙翁のベニスの商人の講義を聽くことが出來た。私は文學上の素養がないので、先生の當時の講義の眞諦を味ひ得なかつたのではあつたが、後年熊本で夏目漱

石先生からオセロの講義を聽いた時に比べても、その感銘の程度は自ら異なるものゝあつたことを今猶印象づけられてゐるのである。

この理科學校は米國人ハリス氏の寄附に係つたもので、下村先生の個人的關係によるものであつた。然し不幸にしてこの學校は同志社自體の不振に禍せられて、開校以來僅か數年にして廢校の止むなきに至つた。それと同時に先生も學園を去られて大阪に赴かれた。先生の胸中もお察しするに充分であるが、又私ども卒業生の母校を失つた悲しみも頗る大きいものがあつた。

大阪に去られた先生は、そこで先生が最も力を入れてゐられた、コークス製造の事業を始められた。今日でこそ、この事業は何人も知らぬ者はないのであるが、當時は全く未知の世界であり、先覺的努力であつた。先生はコークス、瓦斯、染料と連繫のコールター化學を逐次制壓せられて、工業大阪の基本を樹てられ、その功績は洵に偉大なものであつた。

先生の豐富な學力と、深い修養は其風格に一種の光彩を放つてゐた。學界から數少ない工學博士の學位を贈られ、事業界からは大阪瓦斯始め幾多の事業會社の樞要な地位を與へられた。そうしてその人望に至つては、先生が實驗藥品の爆發により失明せられて後も、大阪の地を去らしめず、請ふて先生を留めたことによつて、充分裏書することが出來るのである。

先生は後年靈魂不滅と言ふ著書を發刊された。先生が實に尋常一樣の化學者でないことは、これによつて瞭らかである。化學者は化學だけを知つてゐればよいと言ふものではない。それは單なる化學技術者に終るからである。眞の化學者は矢張りその奥底に何物かの深さと廣さのある人間味を持つことが大切であると信ずる。

爰に先生の一週忌を迎へ萬感交々追憶の情洵に切なるものがある。　（一三・一〇）

五十年前を回顧して

晩秋の一日甲府へ旅立つた。それは舊友寺田喜平治氏の病床を慰めんが爲であつた。その日は丁度土曜日であつた。八王子までの横濱線は別段平常と變つたところはなかつたが、いざ八王子で乘換へて見ると、車中は甲州路を目指す登山者やハイカアの群で超滿員の盛況であつた。

週末を利用して健康を取戻さうとする人々が、最も手輕で素朴な手段を選んだ結果が、落合つて計らずもこの車中の情景を產み出したとすれば、矢張り非常時風景を強く反映してゐるものだと言へよう。

甲府に着いたのは夕刻であつた。私は談露館に宿を選んで一泊した。私が甲府の地を踏んだのはこれで三度目である。その一度は大分前の事であるが、母校の生徒が甲府聯隊で數日間の兵營生活を送つた時、その慰問に赴いた時の事である。

他の一度は今からもう五十年も前の忘れもしない明治二十三年の夏のことだつた。その當時私は京都同志社の中學三年生であつた。その級友の一人が寺田氏であつた。一日その寺田氏と樂しい夏休みを前にして、色々の計畫を語り合つた末、二人で北海道の開墾事業を見學しようと言ふことになつた。

これは別に確たる目的があつた譯ではないが、何か將來に役立つことがあるだらうと言ふ望みを抱いてゐたのである。夏休みとなつて私は一たん鄉里の愛媛縣に歸つた。ところが間もなく寺田氏から手紙が來て、それには五圓の爲替が封入せられてゐた。

文意は豫ての約束通り北海道行を決行したい。就てはこの金を旅費として、甲府まで出て來いと言ふことであつた。私はその金を握つて直ちに鄉里を發足した。御殿場で下車して徒歩で甲府へ向つたのであつたが、河口湖畔まで辿り着いた時は、陽が全く西に落ちた。

私は湖畔の見すぼらしい木賃宿に泊つた。案内された室はもう二人の先客があつた。その一人

は富山の賣藥行商人であり、他の一人は地方の繭の買出し商人であつた。翌朝私は拂曉三時にこの同宿の二人に叩き起された。

それは「今日は天氣が良いから日の出前のみさか富士を拜まうではないか。」と言ふ相談であつた。私はこの二人の人相が餘りよくないのと、何しろ人里離れた山道をしかも夜行するのであるから、少なからず危ぶんだのであつたが、兎に角同行することにした。

道々の不安と警戒の爲に甚だ氣持のよくなかつたことは事實であつた。然し一度峠に立つて天を仰げば富士の高根は眼前にそびえ立ち、折柄の曉雲を破つて大日輪がさつと現れたその時の壯嚴さは、實に神秘そのものであつた。私は以來富士の雄姿を仰ぐ毎にその神靈に打たれるのであるが、しかもこの時ほど強く印象づけられたことはなかつた。勿論これが私の富士を見た最初の經驗であつたことも大きな理由になるであらうが、それよりも矢張り私のその時の環境が大きく働いてゐたのである。

それから山を下つて、石和町を經て畫すぎに和田平町に寺田邸を訪れることが出來た。そこで數日間滯在して、甲府附近の名所舊跡を見物した。御嶽の景勝もその時見物に行つたのであつた。そうこうしてゐるうちに、寺田氏は家の事情で北海道行が不能と云ふ事になつた。

折角出て來た私の立場に非常に氣の毒がられて、その代り東京見物をして歸つたがよからうといふので更に十圓の金を與へられた。私は寺田氏の重ね〴〵の好意に對しては感謝の外はなかつた。勿論北海道行の中止には何んの未練をも殘さず甲府を去つた。私はこの機會に計らずも全く未知の土地であつた關東、東海の各地を見學して大なる收獲を收めて歸國した。私は今日まで內外地に亘り、大小幾十、幾百の旅行をしたが、この時の旅行ほど感銘の深いものはなかつた。

寺田氏は現在も甲府の富豪として知られてゐるが、同志社時代に不幸慈父の長逝に會はれた爲自ら戶主となられ、氏は既にその時から山梨縣の多額納稅者の一人となられてゐた。こんな關係から氏は同志社も三年で退かれ、爾來家事に專念せられてゐる。地を離れ、向ふところを異にした爲に、又氏と相會ふの機會を失しつゝ五十年の歲月を過ぎた。然し氏の名は常に私の念頭から去ることはなかつた。

旅する每に、又旅を思ふ每に、湧然と想起せらるゝはその時の數々の思ひ出であつた。

又世相の移り變る每に、思ひ浮べられるのはその時の旅のことである。昔と今を思ひ合される時の記憶が、必ずこの時に遡るのが私の習慣である。その一つを云つてみると、今の十圓は恐らく一日のハイキング代として消えて了ふであらう。然し當時私の貰つた十圓は莫大な大金であつ

た。

寺田氏は別れるに臨んで私の宿屋を夫々の地に指定して呉れた。何にしろ名だたる寺田家のことであるから、其指名せられた宿はいづれも土地で第一流中の一流であつた。靜岡では大東館・名古屋では支那忠、濱松では大米屋と云つたところであつた。

大東館では立派な部屋で二の膳付きの御料理を食べたのであつたがその勘定は一泊十五錢であつた。この外には茶代も女中の心付けも置かなかつた。何しろその時の私は、洗ざらしの浴衣を着たまゝで、小脇には風呂敷を抱へてゐるといつた風態であつたので、遂に東京の指定宿であつた馬喰町の相模屋では、玄關拂ひを喰ふと云ふ有樣であつた。

この私としては洵に贅澤な旅を續けて、再び歸國したのであつたが、その時にはまだ十圓の金が幾分財布の底に殘つてゐたのであつた。今から考へると、語る私自身さへ全く嘘の樣な話としか思へない位である。

此の經濟的の變轉から考へると甲府の町は、まだ多くの名殘をとゞめてゐる。今度行つてみると石和の町から甲府へ這入つたそのとつつきの場所は和田平町で、昔は此の邊が繁昌を極めた甲府の中心地であつたと記憶してゐるが、今の和田平町は何んとなく場末の樣な思がした。これは

停車場の位置に禍せられて中心點が移動した爲であらうが、又その爲に五十年前の昔の姿が、多分に殘されてゐることに氣付いたのである。これは和田平町としての不幸は別問題として、思ひ出を懷かしむ旅人の私としては、實に思ひ設けぬ賜であつた。

私は此の地に佇んで若かりし私の姿を偲び、又年老ひし現實の姿を顧みて感慨交々、容易に去ることが出來なかつた。私は更に此の地に舊友と五十年ぶりの對面の喜にひたつた。然かも案じた友の病狀は輕快に赴いてゐた。

（一三・一一）

南國を旅して旅行鞄の中より

初冬南國の旅を思ひ立ち、半月を費して素志を果し得た。この旅は山陽九州方面の本會員を訪れ、その英姿に接し、その氣焰を聽きたいためであつた。即ち十一月十七日朝横濱驛を發車して、その夜は京都泊りときめた。これは別に京都に用向きのあつたのではなく、ただ夜汽車を嫌つてのことである。

翌十八日京都を出發して、その夕下關に着いた。山陽ホテルに一泊して翌朝十九日長府まであ

と戻りして、乃木神社に參詣し、更に近年開堂された尊壤堂に詣でた。この長府の町は實に落付いた昔のまゝの士族町であつた。就中尊壤堂の在る附近の町並が氣に入つた。邸々の庭木の手入れも行きとゞき、籬目の正しい砂地の庭や道が何んとも言へない寂を見せてゐた。又この附近の道沿ひに老松が相參差し、その間に今を盛りと燃え立つた紅葉が點綴してゐた。これは正しく一幅の南畫と見えた。

乃木神社のそばに、故大將の生家が昔のまゝの姿で保存されてゐる。見ると臺所付のたつた二間きりの如何にも見すぼらしい家である。がその家の前には所謂お土產屋が軒を並べて客を呼び、或は乃木餅或は乃木煎餅と、乃木で持ち切つてゐるのは、相對照して面白い存在でもあつた。

長府の歸路春帆樓に立寄つて日淸講和談判の跡を偲んだ。以前はこの樓上に當時のまゝの遺跡が保存せられてゐたのであつたが、今度行つて見ると器物調度は全部運び出されて、樓前に別の一館が新設せられ、そこに陳列せられてゐた。この記念館にはその外に廊下を利用して、時代に關係した人々の書畫を陳列してあるので、內容はそれだけ豊富となつた譯である。

その夜門司に渡つて、門司倶樂部に催された會員の會合に列席した。北九州支部長の林君が斡旋せられて、關門附近の會員が集まつて來られた。支那料理で晩餐を共にした後、別室で久し振

りの歡談を續けて、十時近くにやつと散會したほどであつた。その夜は林君が豫め準備して置いて呉れた肥後又旅館に一泊した。

翌二十日門司を出發して久留米驛に下車した。久留米行の目的は私の尊敬する故權藤成卿先生の碑が最近建立せられたので、その墓參をしたい爲であつた。ところが不覺にもその所書きを失念して了つたので、行人に墓所を尋ねてゐると、そこへ折よく陸軍將校が通り合せて、私は先生の緣家に當る人の所在地を大略聽くことが出來た。そこを尋ね、更に墓所を尋ねて、やつと目的を果すことが出來た。一寸の失策から思はぬ手數と手間の掛るものである。それが見知らぬ旅先だけに餘計に厄介なものとなつた。

然しまだ時間に餘裕があつたので、高山彦九郎、眞木和泉守の古跡を訪れ、更に有名な久留米水天宮に詣でた。お畫は案內役になつて貰つた平岡君を始め田淵、池田、鳥海の諸君の好意によつて筑後川沿ひの立派な料亭に招ぜられて、望外の饗應に預つたのだつた。その夕刻大牟田驛に着いた。そこで多數の會員に迎へられ、手荷物を持つたまゝで、宴會場に赴いた。

その料亭はこの秋新築した許りのもので至つて氣持のいゝ會場であつた。會する者は二十四五名に上り、その內數名の藏前出身者を混へてゐた。藏前側では西茂藏君が三池染料工業所技師長

の要位にあり、又會員の方も池田、中島兩君を始め夫々活躍してゐるのは賴もしく思はれた。古い方では第一回卒業の木澤君が筆頭であつた。尤も木澤君がこの三池へ來たのは最近のことである。

宴終り別室で私の挨拶後懇談に移り十時過ぎ散會した。私はその夜三井倶樂部の賓客として遇せられた。この倶樂部は仲々立派なもので、下手なホテルは足下にも及ばない整備さを持つてゐた。翌二十一日朝三井染料工業所と高壓工業を參觀した。晝は再び倶樂部で同所勤務の會員と一緒に午餐の御馳走となり、その午後熊本に向ひ、夕刻着研屋本店に投宿した。

翌二十二日安達謙藏先生の建立に成る三賢堂に參拜した。堂には肥後の歴史的偉人加藤淸正、細川重賢、菊池武時の坐像を祀つてある。横濱に在る八聖殿はいづれも立像であるのと對比して面白い。又堂の形も横濱が八角であり、熊本は圓形である。堂の規模は八聖殿に比し、この三賢堂は些か見劣りがするが、その代り境內の趣きは遙かに三賢堂が勝れてゐる。殊にその紅葉が美しかつた。

三賢堂は八聖殿と同じく參詣者も仲々多く繁昌してゐた。安達先生がこの二堂の建立によつて世道人心に貢獻せらるゝところ洵に大なるは邦家の爲慶賀に堪へないことである。この午後熊本

を去つて、夜に入つて鹿兒島に着いた。宿を岩崎谷莊に選んだ。

私は九州に入ると恰かも小磯大將が私の旅程を先行せられ、私はその後を追つたのであつたがこの夜の宿へ同着することゝなつた。舊知の間であるので敬意を表するところであつたが、訪客に多忙を極めてゐられる樣子であつたので、僅かに刺を通ずるにとゞめた。翌二十三日を鹿兒島見物に費した。會員堀江君が東道の役に當つて吳れた。堀江君は卒業後防腐劑工業に專念され、この數年この地にとゞまつて主として鐵道枕木の製造を業とせられ、爾來非常な好成績を擧げてゐられるのであつた。

宿に歸ると堀江君の通報によつて、鹿兒島電力の島津君が來訪された。晩餐を共にして種々思ひ出話にふけつた。會する人數は少なかつたが、この九州の南端に二人の會員と落合ひ得たことは限りない喜であつた。翌二十四日朝兩君に送られて鹿兒島を去つた。去るに當つても忘れらないその一日の鹿兒島であつた。

城山の南洲先生、西南役と諸名士、その舊跡に、その墓碑に思は遠く幕末維新の昔に走せて感激洶に深いものがあつた。又市の前面に聳立する櫻島の噴煙、あの雄大な姿こそ日本鹿兒島の誇であり、更にこの歷史的環境にある造士館七高生の幸福と、秀才を蒐め得る同校の誇は羨むに十

分である。鹿兒島から霧島神社驛に至つて下車した。更に遊覽バスで霧島溫泉に向ふ途中、霧島神社に詣でた。この日は日本晴の上天氣であつた。

中でも忘れられない景觀は、霧島山の麓をバスで迂回しつゝ進むと、なごやかな氣溫がいつとはなしに自分の身體を輕く抱上げてだん〳〵浮世から連れ去られるやうな氣持ちになつたところに霧島の平野が眼前に展開して來た。その平野の盡くるところに霧島山の偉容を見出した。境內は老杉が天を摩するかと思へば紅葉は紅を流したやうに鮮かであり、その野、その山のたゞずまいが如何にも自然の美と偉を兼ね備へて、天孫降臨の地としてげに相應しい神域であつた。

私は思はず頭の下るのを覺えた。そうして暫し默想しつゝ悠久三千年を遡る神代を偲び、身は自ら央中にあるの思をしたのであつた。私はこの日この時ほど身心を淨化され神々しさの胸に迫るを覺えたことはなかつた。即ち霧島溫泉に一詩を賦した。

霧島祠前樹幾齡
欝蒼針葉護神靈
南遊一夜山莊客
太古松濤欹枕聽

お晝前に霧島溫泉に着いた。名も霧島館と言ふに泊る。この溫泉は泉質が硫黃、明礬、炭酸、鹽類と各種各樣に分れてゐる。この種別を夫々一通り入浴した。そのせいか夜は餘りに身體がほてつて安眠を妨げた。過ぎたるは猶及ばざる如しとはよく言つた。

翌二十五日溫泉を發つて宮崎驛に下車し、宮崎神社に參拜した。この宮崎市の附近に青島と言ふ小島がある。この島は熱帶植物が自生して、近來觀光客の訪れる者が多いとのことである。こゝを訪ふには宮崎より鹿兒島に向つて一つ手前の驛に下車すると、見物を濟ませて次の列車に間に合ふようにブロが合せてあつたのだつたが、それを知らない爲に宮崎までそのまゝ乘越して了つたので、殘念ながら青島見物の機を逸して了つた。

別府は曾遊の地であるので、素通りして夜に入つて宇佐神社前の旅館に入つた。翌二十六日早起して宇佐八幡神社に參拜した。神社は紙幣の繪ともなつてゐる有名な社殿であるが來て見ると案に相違した極めて小規模のものであつた。然し境內は流石に年古りた楠、椎、松などの大木が生ひ茂り、その間に紅葉を覗かせてゐるところは、何んと言つても神嚴無比と言はねばならぬ。

然しこの社殿は近く新殿が造營せらるゝことゝなり、既に政府は七十萬圓を支出し、又多額の寄附金が蒐まつてゐる。その爲に一時の假殿が建てられてゐた。間もなく名實共に備はる壯嚴な

社殿を拜し得ることは日本國民の喜びである。この日午後再び下關に下車し山陽ホテルに休憩の後夜行十一時發列車で東上し翌二十七日朝六時岡山に下車した。こゝで同行した野村洋一郎君と別れ、私は單身となり驛前旅館で朝食の後九時二十分に支線宇野驛に到着した。

そこで林君其他會員に迎へられ直ちに日比町の玉造船所内の倶樂部に案内せられた。そこで造船所の幹部の方々と懇談し、會員の方々の案内で所内を見學することゝなつた。この造船所は大衆的には餘りその名を知られてゐないが、長崎、川崎兩造船所に並ぶ大造船所であつて、一ヶ年の修理船舶が二百萬噸に達し、新造船も十數萬噸に及ぶと言ふことである。從つて其規模も伸々大きく構内を一巡すると延長一里に亘るので、この見學には特に自動車を提供せられたほどであつた。

見學を終へて、倶樂部で御馳走になり、食後又會員等と暫らく懇談した。こゝには會員が七名勤務してゐるが、その内一名は應召せられ、一名は病氣の爲に歸國してゐた。會員との會合はこの夜でなければ困難であらうと豫期してゐたのであつたが、會社側の非常な好意によつて繁忙な時間を特に割いて會員と會合の機會を作られたことは洵に感謝の外はない。この爲私の訪問の目的はこれで達したので、既に會員側で作られた夜の會合プロは時節柄でもあり、割愛することゝ

した。

そこで私の旅程に思はぬ空きが出來た。この空きにふら〳〵と氣が變つて、全く豫定してなかつた鄕里訪問の岐道へ走つた。即ち宇野から船で高松に渡り、そこで二時間ほど休憩した後愛媛縣へ向つた。その夜八時久方振りの故山に入つた。翌二十八日は墓參を終へて靜かに休養し、翌る二十九日朝出立してその晩京都に入つた。

京都ステーションホテルに泊ると間もなく同志社から電話があり、明日の日程を報告された。翌三十日その日程に基いて、朝九時同志社から奥村幹事が車をもつて迎へられたのに同乘し、途中同志社本部に立寄り牧野總長が更に同車して市外岩倉村の同志社高商に赴いた。その講堂に集つた全校生一千名に對し、十時過ぎから支那事變及帝國の立場に就いて講演した。

私は勞頭横濱高工と同校の野球戰の回顧から說き起したので少なからず興味を牽いたやうに感じられた。あとで奥村幹事から聽いたことであつたが、私の講演後同校の配屬將校は特に全校生徒をそのまゝ會場に着席せしめて置いて、私の講演要旨は一々その通りである。この考へ方そのまゝで進んで貰ひたいと共鳴の訓示をしたと言ふことであつた。又私が講演を終つて場外に出ると一二の學生が後を追つて來て、私に支那發展の首途に當つての心得方を聽かせて呉れと言ふこ

とであつた。

この日は恰かも京都ロータリアンの會合が京都ホテルに開かれるので、牧野總長はその賓客として私を招待すると言ふことであつたが、私はロータリ倶樂部に對する私の主義の上からお斷りした。そうすると更にデントン女史のお客として招かれた。女史は同志社女學校構内に居住せられ、同校を主宰されること五十餘年今は八十才を越える老齢であるが、猶講義を續けられてゐる。この日も午餐後授業があると言ふので教室へ出て行かれたが、私は自ら顧みて些か耻ぢざるを得なかつた。

この日午後三時から同志社全體の職員が會合せられ、その席上〃横濱高工三無主義の體驗〃に就いて說明を需められたので、約一時間に亘つて所說を述べ、終つてこの題目に就いて又一時間餘意見の交換を續けた。その夜は寺町の新島會館に職員會から招待せられて晩餐の御馳走になり、その夜は再びステーションホテルの客となつた。

この夜が今度の旅程の打ち留めとなつたが、この日は洵に終幕に相應しい一日であつたことを感謝した。明くれば月も更まり極月の一日特急かもめに乘つて一路東上し十五日振りに再び横濱驛頭に下りたつたのであつた。

（一三・一二）

有吉氏の座談と甜菜糖業其他

母校の商議員であり、本會の名譽會員である貴族院議員有吉忠一氏は、座談の名人として知られてゐる。横濱銀行集會所の午餐會によく顔を出されるが、その會食中や食後の卓上座談は全く堂に入つたものである。いつでも有吉氏の周圍にさへゐれば話題は、泉の如く湧いて、人々の智慾と興趣を潤し滿して吳れるのである。一體座談と言ふものはただ面白い、人の知らないことを喋べつたからと言つて座談にはならない。座談はその人の深い智識と廣い經驗と、そうして犀利な批判がその人の風格を通して表現されるところに妙味がある。座談の名手が數少ない所以はそこにある。有吉氏はその數少ない語り手のうちの、更に尤なるものといつも感服してゐる。

この間のことである。有吉氏は一流の座談に卓子を賑はしてゐるうちに、ふと談は北海道旅行の話に入り、更に獨逸へ旅行した昔話となつた。この話のうちに北獨逸を故長井長義博士と同車して旅した時に、車窓から一面の甜菜畑を見渡しながら、博士から豐富な甜菜の智識を聽かされて、非常に感激した若かりし時の有吉氏を自ら語られたのであつた。私はこの話を聽いて有吉氏

の當時の心境をそのまゝ受け入れることが出來ると共に、私自身も若き日の獨逸時代を思ひ起して、暫し瞑想に耽つたのであつた。

私が北獨逸に滯留したのは、二年有餘であつた。その間に有吉氏が見たであらうそのまゝの風景を見てゐた。そうしてこの風景に非常な關心を持つたのであつた。そうして歸朝後、東北並に北海道に甜菜栽培の計畫を樹て實行の緒についたと言ふ頗る深い因緣が結ばれたのである。

私は當時の思ひ出を新たにする爲に何か記錄がある筈と書庫を探してゐるうちに「東北地方振興策と甜菜糖業」と題する私の手記したパンフレットを發見した。今その緒言を摘記することゝする。このパンフレットの署名は私が東京高等工業學校教授と肩書し、並んで同校助教授野田市三郎氏の名を書してある。

著者の一人嘗て官命に依り歐洲に在り、應用化學を攻究す。滯在三星霜、多くは甜菜糖の產地たる北獨逸に住せり。北獨の曠野一望千里際涯なく、人烟甚だ稀薄なり。秋去り冬來り、氷雪滿地を閉すに至るや、原頭の光景轉々荒凉人をして殆んど不毛の地たるかと疑はしむ、然れども雪消え、霜去り、一陽來復するや、曠野滿頃の靑綠、迢々として又限りなく、麥圃牧場等と、相伍して甜菜の繁茂する狀、さながら燃ゆるが如く、實に形容し難き春夏の野を作るを見る。

我東北地方は獨・露・白・佛の諸國と其風土地勢固より同じからずと雖も、其早く寒威襲來し、陽春來復の遲き有樣は彼此相似たり。甜菜は彼の寒地に能く繁生して、世界砂糖生產額の一半を供給し得るに、何故に我東北地方には此甜菜工業を企圖し能はざるか。由來我國民は極端なる米食主義にして、農業の精力は擧げて米作に傾盡す、爲に東北は愚か北海道より滿洲に至るまで米作を試み、些少の成功は忽にして他の播種耕作を忘れんとする傾向あり。然りと雖も寒地に米作を主作とするは此れ一の冒險事業にして、國家經綸上より深く識者の考慮を要すること、東北地方の農業が既往に之を證明する處にして、同地方に於ける農作物に根本的改革を必要とすること、既に二三の有識者に依て唱道せられたる所以たらずんばあらず。

製糖事業は余の專攻する處にあらず、歸朝の後尙東北甜菜糖との關係は容易に忘れ難しと雖も、公私の業務煩多にして深く考慮畫策をなす閑暇を得ず一年有半早く業に經過したり。昨春再び歐洲にあり、所用を帶び甜菜栽培の諸邦を來往す、秋に至り故國の通信頻りに東北地方の兇作飢饉を傳ふるものあるや、余が腦底宿昔の考慮更に新たなるを覺えしめたり。晩秋歸來して同志を糖業專攻の野田君に得、爾來同君と相謀り業務の餘暇、東北に於ける甜菜糖業の利害を攻究し、去る四月同地方並に北海道の狀況を實地踏査の爲め兩人相携へて以上の諸地方に旅行を

試みたり。本編は此等調査の一端を序述したるものにして、遺漏素より勘なからず、識者の參考に資するに足らずと雖も、此に依り聊か我國米作の安全圏外に考慮すべき一大事業の存在するものあるに就き、多少の注意を朝野に喚起し得ば、余輩の本懷之に若くものあらんや。

（大正三年八月）

私はこの緒言に述べた通りの抱負と信念の下に、我國の甜菜工業を打ち建てようと計つたのである。同志野田氏に實際上の事務を擔任して貰ひ、私は畫策の方面に主力を注ぐべく手分けをした。野田氏は事業に眼鼻がつけば學校の方を辭して、事業に專念して貰ふ筈であつた。この時私達二人は悲壯な決心をしたものである。銅像を樹てるか、將た飢死するか、事は全く大きい投機であつた。

數年に亘つて先づ其基本研究の爲、岩手縣農事試驗所で實地栽培試驗を續けた。その當時の知事は現在民政黨に重きをなす俵孫一氏であつたが、非常な好意を示され且賞讃奬勵を盡され、私にも懇切な信書を寄せられた。ところが私は大正九年に藏前を辭して横濱へ來た。野田氏はそのまゝ藏前に留まつたが、その後友人の傳ふるところによると、殘つた野田氏は非常に寂寞を感じてゐる風であり、傍の見る目も氣の毒であるから、この際横濱へ轉任させてはどうかと言ふ勸め

があつた。色々事情もあつて、即決も出來ないことであつたが、その間僅か二三ケ月を經過して野田氏は大望を抱きつゝ忽然として他界した。私は實に掌中の珠を奪はれた思であり、呆然自失の態であつた。

回顧すると月日の流れは早いものである。その當時野田氏の遺兒滋雄君はまだ四五歳であつたと思つたが、すく〳〵と生長してその後横濱高工應化に入學して乃父の後を繼ぎ、昭和十年に卒業後更に乃父の思ひ出深い東京工大に入學して卒業し、今は立派な技術者として活動してゐる。これは後日譚であるが、野田氏の生前私との間に忘れられない一つの挿話が殘つてゐる。一體野田氏は私とよく似た短身肥滿の人であつた。所謂同病相憐むと言つた譯であつたが、北海道東北地方を旅行した時は、屢々車馬の便の無いところがあり、止むなく徒歩をしたものである。苦勞ではあつたが、身體の爲には良い結果を齎した。そこで二人で相談して、少し身體の脂肪を拔かうと言ふことになつた。

それには徒歩が良い。夏がよいと言ふ結論となり、或夏のこと野田氏の鄕里甲府在の龍王村まで徒歩旅行と言ふ計畫を樹てた。定めの日二人は新宿驛に落合つたのであるが、その日はかんかん照りつける炎暑であつた。二人はこゝから歩いたのでは、無趣味な甲州街道に精力を注がねば

ならぬ。それよりは淺川邊まで汽車で行き、そこから歩いた方が能率的だと言ふことに一決して、さて汽車に乘つた。一度汽車に納つて見ると降りて歩くのは、仲々煩はしいことである。

淺川へ着くと今度は汽車を猿橋まで乘續けて、風光の良いところを歩く方が得策だと言ふことになり、猿橋まで行つて下車し、こゝで英氣を養つて翌日愈々笹子峠を越えようと言ふことで、驛前のきたない宿へ泊つた。宿はきたなかつたが、こゝで食はせた鮎料理は曾て味つたことのないうまいものであつた。翌朝起きて見ると前日に增す好晴で炎熱は遠慮なく迫つてゐた。これには尠なからず意氣を挫いたが、勇を鼓してまづ驛近くの岩殿山へ登つて有名な城跡を見ることになり、やつと山頂に達し下りは大月驛へ出た。

大月驛へ辿り着いたものゝそれから先の徒歩は全く自信を失つた。そこで相談してもう一度猿橋の鮎を食はうと言ふことになり、汽車で逆行して再び猿橋に宿り、望みの鮎を腹一杯つめこんで滿足した。さてその第三日愈笹子越となつたが、どうも氣がすゝまない。結局汽車で甲府行きと決まると急に勇氣が出たやうな始末であつた。二人はこの美事な失敗の原因を、汽車の通る道筋を選んだのが惡かつた。今度は汽車の通らないコースでうんと脂肪を拔かうと言ふ申合せをしたのであつた。然しこの約束は遂に果す機會を失つて了つた。

野田氏逝いて二十年、春風秋雨氏を偲ぶの情切々たるものがある。再び龍王村を訪れ、親しく墓參もしたいと思ひつゝ、未だ素志を果し得ないのを心苦しく思つてゐる。

兎に角こんな經緯から私の企てた甜菜糖工業は、私自身の手でその生成を見ることは出來なかつたのであつたが、私達の努力と宣傳は決して無意義ではなかつた。私達の研究を聞き知つた人人から色々な接衝があつた。就中當時臺灣で製糖事業を起してゐた松方侯爵令息松方正勳氏と、その專務であつた牧山清沙氏は度々私を訪ねて甜菜糖に對する意見を求められた。或時も兩氏の招きによつて帝國ホテルで會見することゝなり、私は千駄ヶ谷の私邸を出て人力車で代々木驛へ向つたのであつたが、その途中店頭に突出てゐた天幕の鐵棒に、人力車の幌を引かけたので、車は忽ち顚覆し、私はいやと言ふほど路上の石に頭を打つけた。然し身體はまだ車中にあり、兩足を天上にして了つたので起上ることが出來ず、附近の人々の助けによつてやつと車外に出ることが出來た。

この出來事は、私の一生を通じて後にも先にもたつた一度の交通事故であり、遭難でもあるので忘れられない事件である。兎に角こんな譯で松方牧山兩氏とも色々交渉があり、遂に兩氏は北海道の甜菜を原料とする製糖會社を起すことになつたのはその後のことである。この會社が出來

てからは別に私とは何等の交渉がなかつたし、いつとはなしに兩氏とも會ふ機會がなくなつて了つた。ところが横濱の在職晩年の秋のことである。私は甥を伴つて北海道に行つたことがある。その序に帶廣にその會社を訪ねてみた。生憎時は時季外れで製糖工場も休止狀態であり、幹部の人々は皆な不在であつたので、充分樣子を聽くことが出來なかつた。

その後のことである。牧山氏が逝去されたことを知つた。勿論直接の通知があつた譯ではなかつたが、私は昔の友誼を思ひ出して、東京に出向いたのを機會に青山齋場に赴いて燒香をした。燒香終つて歸らうとすると、挨拶に堵列したうちの一人が後を追つて來て、鈴木さんではありませんかと聲をかけた。私はそうだと答へると、その人は牧山氏が生前屢々あなたのことを語つて、何かの名義で會社を援助して貰ひたいものだと言つてゐたが、その實現を見ずして逝つたことは、故人も心殘りのことであらうと言ふことを傳へられた。

私は牧山氏が死するまで、私を忘れないでゐて呉れた、その好意に今更の如く感謝した。そうしてこの時の傳言した人に衷心から禮を述べて置いた次第である。

私と甜菜糖はこんな色々の挿話を殘して終幕したのであつた。

平田義雄君がメキシコから歸つて私を訪ねて呉れた。平田君は墨洋丸で歸朝の途太平洋上で遭

難しその二兒と共に九死に一生を得たことを紙上で承知してゐたので、同君の訪問は洵に嬉しくこれを迎へたことであつた。殊に平田君についてはその在學當時から強く印象されてゐたのであつた。と言ふのは大正十四年に、母校に大陸會が組織せられると直ちにその有力なメンバーとなり、翌十五年卒業するや大陸會の趣旨を實踐躬行して、志をメキシコにのばすべく私に相談があつたので、私も種々斡旋をしてその素志は達せられたのであつた。

當時は世界大戰後の恐慌の餘燃未だ收まらず、工業界の不況もどん底にあつて、卒業者の需要も極めて少なかつた際であり旁々海外發展に對して種々努力した甲斐があり、この平田君の渡航を始め南米其他に發展した者が數名に上つた。兎に角平田君はこんな時代に思ひ切つてメキシコに渡り、爾來孤軍奮鬪を續け來つたのであつた。その間の消息に就ては詳細を知ることが出來なかつたのであるが、私は並大抵の困難ではないことを誰よりもよく知つてゐた。

平田君は後にメキシコ人經營の砂糖會社、これは同國唯一の砂糖會社であるが、その會社に勤めることゝなり漸次信任を得て地位も安定した。特にその會社の主任技師である佛人の信頼を得て重用さるに至つた。そこで鄉里である横濱から夫人を迎へて六つと四つの二男兒をあげたのであつた。そうして位地も次席技師に昇進して、これからだと言ふところで、好事魔多しとでも言

ふか、今四月に不幸夫人の急逝に遭ひ、その跡始末の爲め亡妻の遺骨を携へて歸國の途に就いたのが墨洋丸であつた。

平田君は不幸中の幸で、二兒と共に生命を全ふした。然し淋しく異境で失つた愛妻の遺骨も、十四年間の奮鬪によつて勝ち得た總ての物も、何一つ剩すところなく太平洋の海底に沈め去つて了つたのであつた。過ぐる日大陸會の校友に校歌で送られ、壯擧を誓つて別れた横濱埠頭に、再び降り立つた平田君は着のみ着のまゝ餘りに淋しい晴れの歸朝であつた。この災難は恐らく乘船の何人にも一生一度の大災難であつたであらう、が平田君はまだ大きい災難に遭つてゐる。それは在學中彼の大震火災に遭遇したことである。しかも自宅は横濱の中心部にあつたのである。一度會つても人生の大災難である。それを二度と重ねた平田君にはつく〴〵同情の外はない。

私は一日平田君を伴つて横濱銀行集會所の午餐會に臨み、同君の遭難談及メキシコの事情に就て會員に一場の談話を乞ふたのである。この席上には特に平田君がメキシコ渡航に當り、物的の援助を與へられた渡邊利二郎氏の來席を需めたのである。平田君のこの時の話は會員に生々しい印象と強い刺戟を與へることに成功した。

さてこれからの平田君は、どう向き直るであらうか。意志の強い君のことであるから、決して

運命に負けるやうなことはあり得ない。必ず二倍三倍の力を以つて刎ね返し、手に唾きして起ち上ることを信じてゐる。その深い體驗と苦しい經驗は必ずや今後に大きい成果を示す素因となるであらうことゝ考へる。切に自愛を祈るものである。

（一四・九）

名教自然と雅號由來

母校の校庭には、横濱工業會の御骨折りで立派な「名教自然」の碑が建つてゐる。この碑、この文字が校門を入つて第一に目につくところから、今では母校の名物となり、又スローガンとなつてゐる。ところがこの名教自然と言ふ文字は、この碑を建てる爲に考へついて書いたものではなく、その文字の起源は可成り古い歴史をもつてゐる。

なんでも私が母校へ來て、間もないことである。何かの拍子に名教自然と言ふ文字が頭に浮んだのである。言はば靈感とでも言ふのであらう。私は無論それ以前にこんな文字を知つてはゐなかつた。他人からその出所をよく聽かれたが、それに答へることは出來なかつた。それどころか、事實私自身もこんな熟字があるかどうか、甚だ疑問であり、突込まれて尋ねられると寧ろ當惑し

たものである。

然し私はその出所の如何や、成句の存否に拘らず、この名教自然を口誦む毎に、何かしら或爽快な暗示を受けるのであつた。こんなことからこの文字はよく賴まれた揮毫や、記念帖に惡筆を揮つたものである。

何故こんな事が自然に浮んで來たかを考へて見ると、學校も創設時には色々の問題が起り、又私自身も自由啓發の理想をいだいて、色々教育上の問題を考へてゐた時であつたが、忽然この名教自然の成句を得た瞬間、身は無碍の境地にあり、思無邪の聖域に置かれたのである。その時の晴れやかな氣持は今猶新たなるが如く記憶に殘つてゐる。

ついこの頃のことである。ふと岩波文庫のうち、那珂通世博士著支那通史を讀んでゐると、思ひがけなくその西晉章のうちに次の文章を發見して、全く別れた兒にめぐり會つたやうな氣持ちがした。

王戎は竹林の七賢の一なり。朝に立ち、匡救する所無く、時と浮沈す。性復た貧吝にして、田園諸洲に遍く、牙籌を執つて晝夜會計す。家に好李有り。人其種を得るを恐れ、常に其核を鑽つ凡そ賞拔する所は、專ら虛名を事とす。阮咸の子瞻、戎に見ゆ、戎問ふて曰く「聖人は名教を貴

び、老莊は自然を明かにす。其旨同じきか異なるか」と瞻曰く、「將無同」(將た同じきこと無からんや)と、戎咨嗟すること良々久しうして、遂に之を辟す。時人之を三語の掾と謂ふ。

この句中にある聖人は勿論孔子、孟子を指したもので儒教であり、老は老子、莊は莊子を指すものである。「名教自然」の語は一句の中に存在してゐて、然かもその一句の中に孔子、孟子、莊子の四聖人を一括網羅してゐるのである。

尤もこの句の成り立つた、立役者である王戎は餘り感心した人物でないことは、文中自ら明かなことであるが、兎に角世に言ふ竹林七賢の一人であるから、相當の人物であつたことには相違ない。

この王戎に瞻が會つた時の話である。王戎は瞻に名教自然の回答をしたのであるが、瞻はたつた三語の「將無同」で明答した。王戎はこの勝負で立派に黑星を貰つた。そこで仕方なく瞻に職を與へたのである。瞻にするとたつた三語で職にありついたのであるから時人がこれを三語の掾、即ち三語の屬官であると言ふ話である。

して見れば母校の名教自然の碑は、就職に緣のある碑とも言へやう。若し失職の人があれば、碑に向つて禮拜をせらるれば、腰辨當位にはなれる靈驗があるかも知れない。又そこで自慢をす

れば、この碑の建つて以來の母校の就職率のよくなつたのも、實はこの碑のお蔭であると言つてもいゝかと思はれる、但し碑の角をかいて懷中してゐても失職しない爲のお護符にはなるまい。

私に惡筆の道樂がある。この道樂の始まつた抑々の動機が諸君の上にある。その話をして見たい。私は學校を引受けて、創立に當つた際に一番心を痛めたことは、如何にして善良な校風を樹立するかと言ふことであつた。一校の校風を興すのは容易なことではない。少くも五年十年の歳月を費してかゝらねばならぬことである。そうして一度樹てた校風は、これを革めることは仲々容易なものでないのである。そこに校風樹立の苦心は存するのである。

この惱みを續けてゐる際であつた。學校の柔劍道場が竣工して、最初の試合が行はれた。そのお祝ひの記念品として、手拭を染めて來會者に贈ることゝなり、その手拭に書く文字を部員から賴まれた。私は性來の惡筆であり。丸で自信もないし、況んや揮毫などをした覺えのないことであつたので、この依賴には少なからず當惑した。そこで折角であつたが斷りを言つた。然し部員の方ではどうしても、聽入れて呉れないので、仕方なく澁々承諾はして見たものゝ、この處置には全く閉口した。

窮すれば通じたのが、習字のカンニングだつた。赤壁賦の法帖を一冊手に入れて見てゐるうち

に、「清風徐に來つて水波興らず」と言ふ一齣があつた。この文句が思はず私をして膝を打たしめた。そこで「校風徐興」の成句を得た。然しこの四文字のうちの風徐興の三字はこの法帖のうちにあるが、どう探しても殘る校の字が書いてない。せめてその扁なり作なり一方でもあればと思つたがそれもない。そこでこれは諦めて校の字丈は自作と決めて、手習ひに取掛つたのである。やつとの思ひで書き上げて、兎に角私の處女作品が手拭に染まつた譯である。その後の或日のこと月出東山君と言ふ書家が私を訪ねて來た。この東山君は學校の教育勅語や戊申詔書や震災前の卒業證書と、今でもある校門の校名銅標を書いた人で、斯道の大家である。

私は自分の書いた手拭を東山君に示して、その文字の批判を求めたのである。すると東山君は暫く黙つて見てゐたが「先生これには據りどころがありますね。」と云つた。私はこれでギヤフンとなつて了つて二の句が出なかつたが、更に勇を鼓して尋ねた。「この四字のうちではどの字がいゝでしやう。」私の肚では四字とも甲乙はない筈である。それ丈けに自作の校の字が可愛いかつたのである。ところが東山君は「校の字がいけませんね。」と再び痛い所を衝かれた。私はこれで完全に打ちのめされて了つた。矢張り斯道の大家は違つたものである。無駄に修業はしてゐないものだと熟々感じ泌々驚いたのであつた。

このことが奇縁となり、その後卒業の記念にと揮毫を需められたが、私は自分の書は手拭に染めて臺所につり下げられる位が關の山で、臺所を出て玄關や居室に出裝張る資格のないものだと言ふ理由で斷つたのであるが、とう〳〵これも斷り切れないでほつ〳〵需めに應じたのが、心ならずも筆の道樂まで進展して來た譯である。これまで隨分惡筆を揮つて處々にさらされてゐることは、甚だ心苦しいことであり、いつかは一つ筆供養でもしなければならぬと考へてゐる。

ところでこの書から當然派生した問題は、字を書く以上雅號が必要なことである。そこで雅號の即製にとりかゝつた。この頃新聞に諸名士の雅號の由來が連載されてゐる。色々面白い挿話があり非常に興味をもつて讀んでゐる。私はこの新聞に出る名士にはその足下にも及ばないが、單に雅號の挿話と言ふ點になると大いに語るべき挿話を持つてゐる。

始め私が雅號を考へた時に、先づ頭に浮んだのは、羊と言ふ字であつた。羊は第一私の生れ年である。又至極柔和な動物でゐて、有用な動物である。そうして平和的な動物である。是非この羊の字を織込んだ雅號を拵へたいと思つた。然し羊丈けでは雅號にならないし、その相棒の字を何にしやうかと考へたが、一向いゝ智慧が浮んで來なかつた。そこで衆智を蒐めることにして、誰れ彼れにそのお智慧拜借を賴んだのである。その一人の飯塚晶山君の如きは、實に十數種の雅

號を書いて呉れた。

然しどうも氣に入つたものが一つも出て來ない。そこで他力本願を捨てゝ今度は自力で又考へて見た。羊と言ふ字は既定の事實とすれば、問題はその上の一字である。上だそうだ上だと口づさむうちに上なら天だ。天より高い上はない。といふことに考へ及ぶと難問は忽ち氷解した。「天羊」それでいゝ。私は即座に天羊と號した。

この天羊はその後二三年間頗る無事平穩に用ひ慣はされたのであつたが、或時當時武德會々長の本郷房太郎大將が來校講演された後、校長室で學校の道場の爲に「文武不岐」の揮毫をされ「栗洲」と署名された。私は傍からこの栗洲の雅號由來を尋ねると、大將は無雜作に、自分は丹波の生れである、丹波栗から思ひ付いての雅號であると說明された。これを聽いた瞬間、私の心は鄕土愛から出發した大將の雅號に頗る共鳴したのである。

私は直ぐ大將に私の雅號改變を聲明した。私は四國の生れである。四國人は物眞似上手なところから四國猿と言はれてゐる。そこで爾來「猿洲」と私は號したいと大將に言つたのである。然しその後僅か半日か一日位で又心境に異變を生じて、猿洲を廢棄して「煙洲」とした。これは猿は煙に通じ、然かも私の最愛する煙草に通ずることが、私の氣分を表すに最も相應しいからであ

つた。

煙草は私の往くところ、どこにもあり、私の目醒むる間その手を離れることはない。その愛する煙草の煙が雅號に取入れられたことは、自分ながら嬉しくてならなかつたのである。私は爾來この煙洲を愛用し、將來も愛用するであらうことを爰に明かにして置きたい。斯くして私の雅號は三度變還し、三度目の正直によつて本極りとなつたのである。只だ不幸なのは間に挾まつた猿洲である。三日天下ならぬ、二分の一日天下に終つた爲に遂に署名としてこの世の中には書き殘されなかつたのである。氣の毒な猿洲の爲に、最後に謝意を表してこの稿を終りたい。

（一四・一一）

蘇峯先生

二月十七日快晴續きの天候に遊意動いて熱海を訪れ、古屋清快樓に宿を求めた。豫報もせず突然のことであつたことが原因してか、案内された部屋は、所謂行燈部屋に等しい處であつた。私がこの宿へ來たのは、別に靜養と言ふ意味でなく、兼ねて宿に滯在せられる蘇峰德富猪一郎先生に面悟したいのが、大半の目的であつた。

そこで私は直ちに、先生に來意を通じて貰つた。直ぐ訪ねて來いと言ふことであつたので、先生の部屋へ行つた。その部屋は旅館の一劃に新たな部屋を幾つか設けて、同じ宿の中であるが別天地のやうな感じのする構へであつた。私がこの部屋に這入つた最初の印象は、先生の大森にあるお邸の書齋に這入つたのと、同じ感であつた。

先生のお部屋は、南に面した陽當りのよいところで、眼下には熱海の碧い海が展がり、洵に氣分の朗かな部屋であつた。一體先生とこの清快樓とは、仲々因緣の深いものであり、先生が毎年この宿で暮と正月を過されるやうになつて十年に達したのが、もう數年も前のことである。その十年の記念にと、樓主内田氏は先生の詩碑を庭内に建立され、その除幕式には私も參列したことがあつた。

私は先生のお暇を見ては、度々訪問して、色々御高說を拜聽する機會に惠まれつゝ、十九日まで滯在した。この最後の日に、先生からお晝の御馳走に招待せられた。其席に列なる人々は女婿の三宅驥一博士が伊東から來られた外に、二三の同席者があつた。その中に唯一人の女性として熊本から來られた女流詩吟家として有名な一女史があり、先生の作詩を朗吟せられたのであつたが、美聲一座を壓するの思ひがして、全く望外の引出物であつた。

女史は數年前、安達先生に招かれて、横濱の八聖殿で全國詩吟大會に出吟されたことがあると語られた。當時私も私も確かに參會したのであつたが、多勢のことでもあり、女史に對する記憶はないが、兎に角全く因緣のない譯ではなかつた。

先生は今年七十八歳の高齡に達せられたのであり、もう八十に間もないと言ふ年であるが、その血色と言ひ擧措と言ひ、全く綽々として壯者を凌ぐの慨があつた。殊に先生の毎日の勉强振りは、尋常一樣のものではなかつた。例へば朝は拂曉五時に早起されて、先づ机に向つて近世日本史の續稿を執筆せられ、七時にして筆を措かれる。筆を措かれた先生は、始めて机から離れて、湯に入り身支度を整へられて、朝食の膳に就かれ、終つて配達され來つた新聞雜誌を回讀される。

先生の机上には、東京で發行される新聞の全部の外に、地方の主なる新聞も置かれてゐる。几帳面な先生のことであるから、これ等の新聞は必ず、全部一應目を通され、その主なる記事に對する記憶も正確なものであることは、驚嘆の外はないのである。

先生はこれ等の日課だけでも大變であるが、その外にはこの都離れた熱海に居られても、訪問客の絶えぬことである。先生は一々それ等の人々に應接せられるのであつた。その疲れを殆んど知らぬやうな先生の絶倫なる精力には實に驚くの外はなかつたのである。

私は先生がこの來客に妨げられてゐない時に、訪ねても先生の多忙と高齢を考へて、言ひたいこと聽きたいことの半分は割愛して辭し去るのであつたが、先生は恐らくこんな心配は無用な程元氣であつた。

私は曾て夏季に於ける先生の、元氣溢れる生活を目擊したことがある。山中湖畔の山莊に滯在せられた先生は、矢張り拂曉に起き出でられ、質素な運動服を身につけて、山路を散歩されるのであつたが、その歩み方は壯者の如く活潑で急坂に差掛られると、隨伴した人夫が後から腰を押し、その勢ひでぐん〳〵昇つて行かれる物凄い有樣を見て、私のやうな動作の緩漫な者には、驚異の的となつたものであつた。

熱海では生憎、旅館の庭が狹いため、先生の運動をせられる場所がなかつた。加ふるに先生は昨年の御病氣以來、特に用心せられてゐるせいもあるかも知れない。兎に角先生は偉大なる精神力と同時に、偉大なる體力の所持者であることは、實に羨望に堪へないところである。

私は老婆心ながら先生が、今少し閑地にあつて靜養せられ、體力保持の爲に一層留意せられ、精力を蓄積せられて彌が上にも長壽を保たれ、この非常時日本の爲、御努力を續けて戴きたいと衷心から念願して歇まぬところである。

この意味に於て、先生はその身邊に近づけられる人々、及びその種類を充分精選吟味せられることが必要であり、又自ら先生の周邊に在りと信ずる人達も、或種の遠慮をする必要があると考へる。

私は宿を辭するに當つて、清快樓から土産の一包を貰つた。その中に一冊の案内記があり、その卷頭には東郷元帥が宿の玄關で撮影された寫眞が挿入されてゐた。私は自ら元帥を祀つて神社を建立してゐる。彼我對照して奇異の感を抱いたのであつた、兎に角短い滯在の間ではあつたが、先生の活きた人格に接して、遊懦な私には大きい刺戟を受け、新らしい氣魄を生じたかに思はれたことは何よりのお土産であり、先生に感謝する所以である。

（一五・一一）

日本カーボン二十五年史

日本カーボン株式會社は、恰度創立滿二十五年を迎へたのであるが、時局柄祝賀を別に行はず、代ふるに記念出版「日本カーボン株式會社二十五年史」を出版することになり、近く刊行の運びとなつてゐるが、私も需められて序文を書いた。

その序文は次のやうなものである。序文として讀んで貰ふよりも寧ろ會社工場の生ひ立ちはどんなものか、その斷面を知る一つの資料としてである。

（一五・二）

日本カーボン株式會社が今年創立滿二十五年になるので、其歷史を編纂するから、私に序文を書けとの御依頼であつた。冊子の序文と云ふものは自序でない限り餘り讀者の感興を惹かないものである。

私はこの割のよくない役目を仰せ付かつて何を書いてよろしきや聊か當惑した。

二十五年史の編纂委員長田中洸氏が編纂の目次を參考の爲め私に示されたが、あらゆる方面から、日本カーボン會社の發展の經路と事實とが網羅し盡されて居る。

どこの歷史にも紀元前と紀元後のものがある。日本カーボン會社二十五年史はこの意味からすれば恐らく紀元後に屬する正史であることと想像する。

其處で私は日本カーボン會社の紀元前の歷史を、二三記憶のまま書き列べて其責を果したいと思ふ。尤も私自身は既に社會の第一線からとは云はず、第二線第三線からも退却して、所謂、行雲流水で、工業界の現勢には無智識且つ緣故のない身であるから、其れが却つて私に相應した役目であるとも考へた。

處で、さて書き始めようとすると、今度は何處から筆をつけたものかと案じ出した、すると眼前に浮んだのは、二十五年前の會社の姿であつた。

會社が創立に當り其造營物が建築せられたのが、私が支那方面に旅行した其留守中であつた。歸つて來て見ると神奈川の浦島町の淋しい原つぱに貧弱なバラック樣の建築物が出來てゐる、全く新開地のお湯屋で、カーボン會社の一枚看板の煙突はどう眺めてもお湯屋の煙突以上ではなかつた。其れも其筈二萬五千圓が一切のものであつたのであるから無理がない。お湯屋の煙突でも宜しい、兎に角、其煙突から一條の黑煙が寒い冬空に元氣よく上つて居るのを見て喜びに堪へなかつた、同時に石川等氏も嘸、滿足したであらう、又中村房次郎氏の肝煎が實に有難いと云ふ感が湧き起らざるを得なかつた。

私はこの時代のことを何かの記錄によつて一應確めて置かうと考へて、心覺えのものを探したり又私の日記帳を繰つて見たが、性來粗笨の私が禍して何の手掛りも得られなかつたのであるが、私の記憶によると大正の始めの事である。當時私は藏前の高工に教授をして居て東京市外であつた千駄ヶ谷町に寓居して居た。同じ町內に石川等氏が住居して附近の小さなカーボン製造所に勤務して居られた。石川氏も藏前高工の出身であると云ふ緣故から、つい知合となり、時々往復を

した。

そのうち石川氏は何かの事情で會社を辭職せられ、就職問題に付き私に相談せられた。矢張り餅は餅屋であるから、これまで手がけたカーボンの製造がよからうと云ふことになつたが、其當時は入社する樣なカーボンの製造所と云ふものがなく、愈々カーボンに從事するとすれば新會社を設立するより外がない。何しろ時が時で、工業進展の目醒しい時代でなかつた爲と私の不精で容易に目鼻がつかず賴まれ甲斐がなかつた。

そのうち確か大正三年のことである、或る日近藤賢二氏と代議士であつた池田寅次郎氏との兩人で私を招いて食事をしながら何か小資本でやれる事業がないかと懇談せられた。私は渡りに舟と早速にカーボン製造の話を持ち出した。

それから間もなく近藤氏は私の紹介で石川氏と千駄ヶ谷の私の宅で初會見をし、其後幾回かに亘つて設立計畫の案を煉つたのである。その場所はいつも日本倶樂部であつたが倶樂部は當時日比谷の今の電氣協會のある處に建つて居た。

設立の計畫が進捗して愈々具體約段取りになつた時、測らずも世界大戰爭が勃發した。此時の財界人一部の考へ方は靑天霹靂、歐洲大戰爭じや、其影響は必ず我帝國に波及するに極つて居る、

こんな時には資本を大切に手許に握つて置くべきで事業に投資することは甚だ危險であると云ふのであつた。隨つて事業界も一時大戰其のものの如く暗澹たるものと化し去つて、近藤氏との話合ひも遂に旗上げの土俵際でうつちやられて了つた。

又石川氏には最惡の受難時代が來た、其當時私は所用の爲に暫時東北地方へ旅立つことになつた。石川氏は上野驛に見送つてくれた。申すまでもなく氏がカーボン問題で苦勞して居る爲で、此の時は實に氏に氣の毒に思ひ、私も何とかして氏の爲努力しないと濟まぬと云ふ氣分で、所謂胸一杯であつたことは今に記憶して居る。

それからこの計畫を横濱の茂木惣兵衞氏へ持ち込んだ。茂木氏は顧問技師の黑板工學士に命じて事業の成否に就て調査をなさしめたが、不幸にしてカーボン事業否定說で茂木氏とも又全く緣切りになつて了つた。かうなると流石呑氣な私も大いに焦り氣味になつて最後に中村房次郎氏に持ち出した。中村氏には初めから希望を抱きながら種々の事情からこれまで遠慮して居たのであつた。

所がこの最後的切札であつた中村氏への話は私の誠意が屆いたものか、別に面倒な交渉も六ケ敷き條件もなくそのまま採擇された。

此は後で聽いた話であつたが中村氏は此時カーボン會社設立の提案を横濱銀行集會所の午餐會の後で集まつた澁澤義一氏や故大濱忠三郎氏其他四五の人々に披露して其株主たるの承認を求められた。然し集まつた人々は唯一人として、當時の事であるからカーボンに就ての知識を持つた人は居なかつた、一體カーボンとはどんなものか、そして又如何なる用途のあるものかとの當然の質問には、設立者中村氏も返答の出來る筈のものでもなかつた。

中村氏は實は此の話は藏前高工の鈴木と云ふ男が持ち込んで來たものである。カーボンに關する質問には充分答へる事は出來ないが、兎に角、自分は鈴木と云ふ男を信用したのであると、至極たよりのない辯明をせられた。列座の人々はそれでは我々はカーボンも知らない、鈴木といふ男も知らないが、只中村氏を信用して株を持つことにしようと、極めて朗かな申し合せで其創立が決定されたといふことであつた。

此れで愈々日本カーボン會社は陽の目を見た譯である。石川氏の依賴を受けて長い月日を經過してやつと安心出來たのであつた。之れが資本金十萬圓拂込二萬五千圓の會社であつた。

其後の經緯は私の述べる範圍ではないが、今日の隆盛を見るに至るまでには幾多の波瀾曲折があり、決して坦々砥の如き鋪裝道路を歩んだものではない。初めの數年間は世界戰爭の波に乘つ

て所謂、順風に帆を上げて洋々たる春の海を快走したが、戰爭が終ると忽ち不況の波に阻まれた。さうなると會社の內部も萬事が圓滑に又明朗に經營が運ばれない。社長の中村氏は增田屋王國と云ふ大世帶を切り盛りして居るのであるから當時の日本カーボンと云ふ樣な小さな會社に丹精して居る譯には行かない。

そこで私は會社には關係がないが內外の情勢に多少の憂慮を感じ、當時比較的閑地にあつた近藤氏の事を思ひ出し中村社長に進言し、近藤氏を煩はして暫時會社の監督に當つて貰ふことになつた。思へば近藤氏とカーボンとはよくよく緣のあつたものである。抑〻の始めは獨力で經營する筈であつたのが挫折し、更に中道にして再び近藤氏の登場となり、其まま今日に至つた。

事業の隆盛は同氏と發頭者の石川氏に負ふ處眞に大なりと云はねばならぬ。一面又日本カーボンの大發展は我帝國工業の其後の異常なる大進展に呼應し來つたものである。日本が亞細亞大陸に其鵬翼を擴げた今日、日本カーボンは今日の現狀に猶決して滿足しては居られまい。其技術の研鑽に、其信用の獲得に、其販路の進展に、會社の首腦者を始め社員又從業者一同が一致團結私を棄て公に殉じ、工業日本精神を發揮し更に國家に貢獻せられんことを希望して止まない。

さるにしても、二十五年の昔を偲へば今日の日本カーボンは全く浦島太郎の里歸りの驚きに似

たものがあり、玉手箱の不思議に近いものが感ぜられるのである。

往時唯だ夢の如し、一言所感を記して序文となす。

昭和十四年神嘗祭佳節

六ッ川寓居に於て

煙洲　鈴　木　達　治

病　床　偶　感

日清戰爭と言へば、今から四十五六年も前のことである。當時の記憶をもつ人は、六十歳以上の年配でなければ、確かな印象はない筈である。

當時の清國と言へば相當の强國であると言ふ感じを、我國でも與へられてゐたものである。日清戰爭の始まる一兩年前のことである。支那の北洋艦隊が來航した。當時我國には一隻もなかつた鋼鐵艦である定遠、鎭遠の兩主力艦を主軸とした、堂々たる編成であつた。實に威風堂々と我沿岸を示威して廻つたのである。

この時の與へられた脅威は、今日これを回想しても、猶慄然たるものがある。その上に我國は外國と戰ふことは、遠い昔の元寇の役以外には大した經驗を持つてゐなかつたのである。

七百年の長期の間我國はただ武陵桃源の島國として殘されてゐたのである。斯かる環境にあつて、日清の風雲急を告ぐるに至つたことは、何んと言つても一大國難であつた。從つて國民の緊張振りは並大抵のものでなかつた。

當時私は熊本の學校に奉職してゐたが、その年の七月に暑中休暇となつたので、熊本驛を出發して汽車で、鄉里の四國に向つた。この車中で私は思ひ掛けない光景に接した。と言ふのは列車が停る驛々からは、動員された兵士達が、萬歲の聲に送られて、續々と乘り込んで來た。私は斯くまで事態が切迫して居るとは考へてゐなかつたのであつたが、この光景を眼のあたりに見て、愈々日清戰爭は必至であると感ぜられると同時に、全身の血は湧き、肉躍るの思ひがしたのである。

列車が進むに從つて、乘込む兵士の數を增し、遂には文字通りの壽司詰めとなつた。この超滿員の軍國列車は、北九州の平野を北へ北へと驀進して行つた。列車の進むところ、沿道の民家や田圃に耕す農夫等が、手を振り、鍬を上げ、聲を限りに萬歲を叫んで、列車の兵士を勵ました。

その光景は實に悲壯なものであつて、私は思はず双頰を濡したのであつた。

列車が小倉に着くと車内の兵士達は、一齊に下車し、車内は忽ちがらんとしてしまつた。あたりを見廻すと、殘つたのは私一人であることに氣がついた。私はこの騷ぎの爲に、熊本を出て以來何に一つ口にせず、空腹と緊張の後に來た疲勞、そうして七月の暑さは、忽ち私を死せるが如き熟睡に誘つた。全く前後不覺に寢てしまつた。

眼を覺まして見ると、あたりが何んとなく變つて見えるので、立ち上つて見廻すと、私を乘せた車はそのまゝ門司驛の車庫の中に引込まれてゐた。然かも私の荷物は何一つなくなつて、僅かに私が枕替りにしてゐた風呂敷包み一個を剩すのみとなつてゐた。

夏休みも終り私は再び熊本に向つたが、今度は陸路を避けて、海路をとり別府に上陸し、それから徒歩で、中部九州を横斷して、三日目に熊本に入つた。この時はもう日清戰爭は宣戰布告後であつたので、沿道の町々、村々はどことなく緊張した空氣に包まれてゐたが、熊本に入ると全く軍國氣分が横溢してゐた。町の廣場にはバラック建ての小屋が、澤山急造され又急造されつゝあつた。これは馬匹用その他の爲であつた。人馬の往來も物々しく、辻々の掲示紙などいづれも戰爭氣分を湧き立たせた。

私の學校でも校長が卒先し義勇兵の組織に、大童となつてゐるところであつた。これは學校だけでなく、熊本にも他の人の發企で矢張り義勇兵を組織する運動があつた。九州は十年の西南戰爭があつて僅か十五六年しか經つてゐない時であり、戰爭に對する觀念が一層深刻であつたことが、この義勇兵問題となつたのであつた。ところがこの運動は間もなく要路から差しとめられた。と言ふのは國防のことは、國家が確信をもつて引受けてゐる。銃後の民は義勇兵として起たずともよろしい。皆その道に就いて安んじて業を勵むべしと言ふのであつた。從つて學校の義勇兵運動も、解消したのであつた。

然し學校の生徒のうちには、まだ中學生の年齡の少年ではあつたが、決然起つて、義勇兵になれなければ軍屬になると軍屬を志願した者が出た。この少年は後年ブラジル國サンポーロに渡り、我移住民の先驅者として盡粹し、先年その死するに當つて、前例のない移民葬を以て厚く葬られた上塚周平氏であつた。兎に角當時はこの少年の意氣が、即ち全國民の意氣であり、所謂擧國一致して淸國討つべしとなし、その敵慨心は非常に高度のものであつた。

次に起つた彼の三十七八年の日露戰役にも同樣の緊張を示した。日露の役は既に日淸役の經驗があり、加ふるに北淸事件によつて、各國の軍隊と協同作戰をした。と言ふ戰歷を持つた後では

あつたが、兎に角相手の露西亞は、有名な陸軍を備へてゐる。恐らく世界一であるとも見られてゐた。この陸軍には、ナポレオン一世さへも散々な目に會つたと言ふ歴史をもつてゐる。從つてこの戰爭の成行きに就ては國民の一人々々が切迫した氣持ちで凝視してゐた。從つて戰況を報ずる號外は實に注意深く熟讀されたものであつて、戰況に對する注意力の旺盛なことは、到底この頃の比ではなかつた。

今次支那事變をこの兩役に較べると、今事變に於いては初めから戰爭は敗けるものでないと言ふ觀念が國民全般の頭の中に泌み込んでゐる。國際的の狀勢は決してよくないとは思つてゐるが、その惡影響を受けることが少ないのは、我國が實に惠まれた國であることだ。戰爭は永引いても食糧には決して困らない。これは歐洲のどの國に比べても非常な强味である。と言つた根據から樂觀的な態度が採られて來た。

然しこの見方や考へ方が、今次の事變をより多く混雜させ、澁滯させたことも確かである。殊に昨秋以來日常生活が多分に脅威される狀態に置かれた原因を探究して見ると、これは決して物資そのものゝ不足から來たのではなくて、要するに政府施設の不備と國民の事變に對する認識並に心構への錯誤である。これを約言すると皇道精神の透徹しない結果と言ふことである。皇道精

神は上下を通じて熱心に唱道されたところである。然し顧みるとこの皇道精神の本義が、どれだけ我國民の日常生活の實際に發揚されたか、その業績を冷視すると洵に寒心に堪へない次第である。

第一にあの精神總動員と言ふものが、近衞內閣によつて提唱せられ、爾來後繼政府の重要な一つて施設となつてゐる。これは非常に結構なことである。然しながら國民がこの精神總動員に對してどれだけの協力を拂つてゐるか。又何人が中堅となり、卒先して事に當つてゐるかと言ふと、これはもう一つのお題目的價値しかない、過去の代物と言ふ感じがされてならないのである。斯かる組織をもつて、國民を率ひて行かうなどゝ言ふことは、倒底不可能なことである。

眞に我國を救ひ、我國民を動かして行くには、どうしても熱があり力のあるものを持つて來なくてはならない。それは何んであるかと言ふと、私は躊躇なくそれは青年の力だと斷言する。若し眞に國民精神總動員の實を擧げるならば、その中核は青年學徒たらしむる組織に改組するがよい。そうして青年學徒を動員し、青年學徒を馳驅せしむることによつて必ず所期の成果を得べきことを信ずるのである。

この頃獨逸から來た青年隊を見ても、獨逸が如何に青年を社會機構の上の重大役割を背負はせ

てゐるかを知ると共に、獨逸が今度の大戰に於て、青年學徒を戰場に送つて、活躍せしめてゐる實際的の例證により、獨逸の採る方策の理論と實際の一致に對し敬服せざるを得ないのである。

支那に於ても又同樣である。支那の青年學徒が、事變の前後に於て如何に行動し、如何なる關聯を事變の上に齎したかは、猶生々しい事實であらう。斯かる國と斯かる青年の動きを見て、さて我國の青年學徒はどうであらうかといふと、學園學窓と、時局は全く別箇獨立のもの丶如く感ぜられる。青年學徒は恰かも事變を對岸の火災視してゐるやうである。然し學校も學生も決して事變の外にあり得ないのである。正に事變の上に坐してゐることを二六時中忘れてはならない。と言ふよりも事變の眞只中に飛込むだけの意氣がなくてはならないと私は考へる。青年學徒諸君よ、果して其意氣と覺悟を有するや否や。

近頃興亞奉公日なるものが行はれてゐる。これ又結構なことである。然しこれも既に餘りにも形式化した恨みが深い。

須らくその精神を衝いて、擧國一致の基礎を固めたいものである。今日の議會の有樣を見ても議員が精神總動員に就て質問すると、政府の當路者は自らその趣旨の徹底しないことを公言して憚らない。これは質問者の意に迎合する結果でもあらうが、實に驚き入つた事實である。政府自

らその不備を認めながら何等その前後處置を講じないでゐるが如きは、問題にならぬ不眞面目さである。

斯かる不眞面目な連中にこの大切な國策を任せて置いたのでは到底その實を擧げるの日は來ることはない。

要するに精神總動員も、興亞奉公日も案そのものゝ問題ではなく、これを行ふ人の問題である。行ふに適當な人の選を誤つたことに大きい錯誤がある。若しこの二つの行事にして當初より其威力を發揮してゐたならば、恐らく外侮を受くることなく、從つて今日の如き不利な國際情勢は招來せられなかつたことゝ信ずる。又支那事變の處理の上にも大きい變化を及ぼし得たと考へるのである。

斯かる國內狀勢にある結果、國民も徒らに事變の眞髓を把握することが出來ないでゐる。

皇紀の式年を迎ふに當つてもいづれも的外れの記念事業を樹て、精神を忘れて事務的末梢處理に沒頭してゐる。即ち植樹をするとか、神社佛閣を修理するとか、或は療養所を建てるとかの諸案が出てゐるが、勿論これとて決してやらなくてよい仕事ではないが、この皇紀一遇の記念事業として、是非やらねばならぬと言ふ問題ではないと考へる。若し國家が國民が眞に時局を認識し

てゐたならばそんな悠長なことは考へてゐられない筈かと考へられる。

今眼前に降りかゝる火の粉は言ふまでもなく、事變の處理解決に外ならない。これを措いて他に大きい問題はあり得ないのである。故に重慶政府の打倒、東亞新秩序の確立をもつて、二千六百年の記念事業とし、この一つの目標に全國全國民が身も魂も打込んだならば、事變は必ず解決し東亞の曉明は招來せられることを確信する。この最高至高の目標を忘れて單にその末節に拘泥し、御座なり言ひ譯的の記念事業をして晏如としてゐるその精神こそ我建國の大精神に反するものではあるまいか。

我有史以來の三大戰爭を自ら體驗して憂國の情禁ずる能はず、爰に一言時弊を駁す所以である。

筆を措くに當つて私の身邊の小事を一言することを許されたい。私はこの一月以來兎角に健康勝れず多くは藥餌に親しんだのであつたが、三月に入つて殊に甚だしく、遂に病臥して體重二貫目を減じ、又舊態をとゞめざるに至つた。偶々病中作あり

須教軍後誓無患　聖戰三年人未還
借問弘陵幾百子　誰飛羽檄救時艱

（一五・三・二三）

病床閑話

私と煙草 その一

私が煙草を喫み始めたのは、二十五六才の頃からであつたと記憶する。その當時喫んだのは、岩谷の天狗煙草とか、村井のサンライスなどであつた。いづれも時代の流行煙草であつた。勿論まだ政府の專賣制が布かれない以前のことである。

こんな譯で初めは、紙卷煙草許り喫んでゐたが、紙卷煙草から葉卷煙草に移つたのは、明治四十一年の秋獨逸に滯在した時のことである。私はその時ハノオバアと言ふ古都に居た。私の下宿してゐたのは、老人夫婦の家であつた。この老主人は煙草好きであつたが、紙卷は一切喫まないで、葉卷だけを喫んでゐた。然かも面白いのは一週に一本、それは日曜日の晝食後に喫むと言ふ掟を定めて、これを嚴格に守つてゐた。

この老主人が葉卷を喫む時の光景は今でも眼前に浮ぶのであるが、食後に葉卷を一本持ち出してそれを指の間に挾んで見たり、又掌の上にころがして見たり、暫くの間は丸で珠玉を鑑賞してゐるやうな樣子である。その顏つきも如何にも嬉しさうに相好をくづして居るのは、傍で見る眼

も樂しく朗かなものであつた。

そうして後に始めて、火をつけて、如何にもうまさうに、煙の一吸ひ一吐きを味ひながら靜かに紫煙を立てゝゐた。寧ろ煙草を喫むのでなく、煙草を食ひ又味つてゐるかのやうにも見えたのであつた。

私がこの時喫んでゐたのは、矢張り紙卷一天張りであつた。ところが、老人は食事の度毎私に紙卷は咽喉を害して、衞生上よくないと言ふことを力說して、葉卷を喫むがよいと、頻りに勸めて呉れた。餘り熱心に勸められるまゝについ老人の言葉に從つて葉卷を燻らせて見た。ところがその味もよし、刺戟もないところから、そのまゝずる〳〵と葉卷黨となつて了つた。これが今日まで續いてゐるのである。

こんなことから、葉卷の方もだん〴〵進んで、獨逸の二ヶ年半は一日平均して六七本宛の葉卷を喫んだものである。そうして今度は反對に、時々老主人に葉卷を頒けてやつた。老主人は「ダンケ・シエーン」と喜んで手を出した。そしてこの時は例外として、その煙草を喫んだ。

私が獨逸人の透徹した節約振りと、規則正しい生活に對して、驚異の念を抱いたのは、この時からである。

私はその後歸朝して、一番困つたことはこの葉卷煙草であつた。私は有體に言ふと、留學中に相當の借金さへ出來たので、歸朝してから悠々葉卷をふかしてゐるやうな餘裕のある筈はなかつたのであつた。當時一番安い葉卷は、ロンドレスと言つて、一本五錢であつた。この葉卷は今は四倍の二十錢となつてゐる、然し經濟上止むを得ないので、この五錢の葉卷で我慢するより外はなかつたのである。我慢はしたものゝその不味さ加減は實にお話にならなかつた。

獨逸で私の喫んでゐたのは、五錢だと相當上等のものであり、又外國に居れば、經濟上にも融通がつくので煙草代は別に財布に響くやうなことはなかつたのである。こんな譯で私は一時禁煙を決心して、約一ケ月間續いた。然しどうにも辛棒が出來なくなつて、又喫煙に戻つた。その時はもうロンドレスの安煙草で我慢が出來るやうに習慣づけられたのである。

それからの喫煙生活は、平凡に續いた。時には思はぬ飛入りの上等な葉卷が手に入つて、生活記錄を豊かにして呉れた。

その一つの大きい收獲は、大正十一年のことである。時の横濱稅關長から稅關の葉卷標本となつてゐる數十種その數三四百本を手續きの上で拂下げて貰つた。この中には珍らしい種類のものもあつたが、概して品質は中以下のものに屬してゐた。

私はこのうちで二百本だけを瓶詰めとして、保存しその殘りを次ぎ〳〵に喫んで行つた。そうしてこの瓶詰めの葉卷は、私が死んだ時棺の中へ入れて貰ふやうに、遺言をして置くことにした。私は三途の河原を悠々と慢歩しながら、紫煙をふかせ、先輩の伊藤公や野田大塊翁など〻煙草の話をしながら、新着の葉卷を一本宛分け與へるであらう場面を想像して、甚だ愉快に感ぜられたのであつた。

ところが間もなく襲つた彼の大震火災に出會つて、私の心境にも又現實にも非常な變化が起つた。と言ふのは私はこの日、いつもの日程通りであれば、その時刻は横濱銀行集會所に行つてゐる筈であり、そこへ行つて居ればあの無慘な倒壞家屋の犧牲となつたことは明かである。

全く幸運にも私は、學校で時間を思はず過してゐる時突如起つた大震災に微傷だに負はずして、屋外に遁れ去り、その上私の住宅も大なる損害を蒙らずして殘つたのである。

この時以來運命は、私に一つの暗示を與へた。そしてもう私はこの世のものではない。一度死んだものである。これから先きの生命は餘分なものである。この餘分の生命は働けるだけ働いて、國の爲に捧げよう。と固く決意したのである。

死んで喫む筈であつた二百本の貯藏葉卷も、棺に入れる必要がなくなつた。死んだつもりで喫

んで了はう、その代り死んだつもりで働かうと、必死の努力で東奔西走した。自分ながらよく働いたものだと今でも思ふ位、働きながら、葉卷を唯一の伴侶とし、慰籍者として愉快に働いたのである。この葉卷はその年の十月十八日で盡きた。つまり五十日間で、二百本を喫み切つて了つたのである。

この煙草が盡きた時に、私は考へた。この復興の大業が始まつてゐる最中に、自分が葉卷をふかすのは如何にも心苦しい。一層のこと禁煙しようと決心して、斷行を續けた。ところが翌年三月下旬に學校の入學考査が始まつた。その機會に身體檢査場で體重を量つて見ると、驚いたことには……僅か五尺の短軀である私が、二十貫を超えてゐて、この半年に一貫五百匁を增加したのであつた。

傍に居た教務主任で生理學造詣の深い故横地君がこれを見て、この上の肥滿は危險である。禁煙の結果の肥滿であるから、これは早速又喫煙を始めるがよいと忠言して呉れた。私は背に腹は代へられず涙を呑んでその忠言に服したと言ひたいところであるが、實のところは渡りに舟と喜んで又もとの愛煙黨となつた。

それから再び喫煙生活は續いて、濱口內閣に至つた。この內閣は消費節約を標榜し、突然煙草

の値上げをした。これは私をして少なからず憤りを感ぜしめた。そうして私は自ら深く期してこの內閣の存續する限り斷乎禁煙することを聲明した。

私の憤慨は實にこの內閣の機構に對する不平であつた。即ちこの煙草の値上げは、愛煙家にとつては、稅の値上げに優る大きい影響を與へるものである。稅の引上げは議會の協賛がなくては實行が出來ないところである。然るに煙草は一官吏の意志で自由に値上げが出來る。然かもその及ぼす影響が稅以上でありとすれば。こんな矛盾はどこから來るかと言ふと、畢竟それは政府の機構の不合理であり、運用の不眞面目であると言はねばならぬ。

こんな內閣の値上げを甘受することは最も潔しとしないところであり。その對案としては、禁煙が最も良法であることを信じ、又それを實行し續けたのである。

私は昨年十二月下旬に、輕微な風邪に侵され、二三日病臥したが直ぐ起き出して外出した。ところが咳が可成りひどく出て、仲々止まない。そのうち一月の中旬頃から下痢が加はつて、それが三月の上旬まで、約五十日間に亘つて連續した。その結果體重は二貫目以上を減じ、十五貫四百匁とかつてない低率を示した。これを肥滿時代に較べると實に五貫目を減じた譯である。

醫師に診斷を求めたが、別に大した手當法の必要もないやうな話であつたので、特別な養生も

せず、咳をしながら、下痢を續けながら、所用のまゝに東京へも度々出て行つた。

ところが三月十二日に、診斷を受けた醫師から、重大な宣告を受けた。この容體はもう肺炎か肋膜の一歩手前まで進んでゐる。絶對安靜の必要があると嚴命を受けた。そこで仕方なく命ぜられるまゝに三週間、全く床上の人となり、身動きさへ出來ぬ始末であつた。然し床中にありながらも、煙草の方は相變らずふかしてゐた。

喫むには喫んだが、殆んど煙草の味はしなかつた。ただ喫んでゐると、何んだか氣の濟むやうな氣がしたのである。だが喫み過ぎると脈搏が昂まるやうな氣持ちがするので、勢ひ節煙することに努めた。

病勢の激しい時は、數日の間一本も口にしないこともあつた。然し全く煙草から離脱することは出來ないので、頭の中で色々と煙草の妄想を畫いて見た。

その第一に考へたことは、一體喫煙は罪惡かどうか、と言ふことであつた。世界の國々には、禁酒の國はある。曾てはアメリカは、全國に禁酒令を布いたことがあり、今でも洲によつては依然禁酒を實行してゐる。

ところが世界のどの國を探して見ても、禁煙國と言ふものは一つとして存在してゐない。して

見ると喫煙はいゝことではないとしても、罪惡ではない。又よし罪惡と算へる者があつても、酒の罪惡とは比較にならぬ輕度のものだと言ふことも出來るのではあるまいか。

可愛いゝ娘を嫁にやる場合、相手の婿が酒を呑むかと言ふことは調べられるが、煙草を喫むかと言ふことは、餘り調べられもしないことであり、又よし調べられて、その事實があつたとしても、さう大して重大な結果を與へるものとは考へられない。

又月に一度の興亞奉公日に當つては、酒を呑むな、煙草を喫むなと、これは同罪に扱はれてゐるやうである。

こんな事を綜合して考へると、煙草は一つの罪惡のやうでもあり、又そうではないやうでもある。更にこれを事實問題として考へると、酒に醉拂つて亂暴を働くことはあるが、煙草に醉つて亂暴をしたと言ふ話は聽かない。して見ると同じ醉ふにしても、煙草は酒に比べて微罪放免と言ふところかも知れないのである。

尤も嚴格な規準を以て、道義を律するキリスト教信者とか、矯風會のお歴々の前では、煙草も全く頭の上らぬ同罪であることゝ思はれる。

私自身の考を有體に言ふと、煙草も決して良風であるとは言へないと考へる。私が震災直後に

斷行した禁煙の理由も、道義的觀念から出發したものであつたことは僞らざる事實である。

抑も喫煙の起原はと言ふと、歐亞に亘る所謂舊世界でも、四百年前までは、喫煙の風習は、全くなかつたものである。然るにコロンブスがアメリカ大陸を發見して、未知の人類文化を色々發見したうちで、彼がアメリカインデイヤンから敎へられた煙草こそは、その最大の賜であつたと禮讃するに躊躇しないのである。

彼コロンブスがこの煙草を發見して以來、世界の人類が、如何に幸福に、その生活の內容を豊富にし得たことか、これは間違ひのない推論であると考へる。

ただ世界人類の總てが、愛煙家ではないが、如何なる人でも茶と煙草と酒の三つの一つをたしなまぬ者はない筈である。であるから正確に言へば、人類を三分して、その三分の一は煙草黨であり、愛煙家であると言ふことは、決して過言ではないと考へる。

つまり世界人類の三分の一は、煙草の存在によつて、日々の生活を享樂し、人生を樂しんでゐることを考へる、とその功德も亦實に偉大なものと言はなければならない。

煙草！

（一五・五）

病床閑話

私と煙草 その二

煙草はなくとも、人間は生活が出來るではないかと言ふ者もある。して見れば煙草は人生には無用のものではないか。と言ふ議論も一應は成り立つ理窟である。

然しこの理窟は一部ではあるが、全部ではない。例へば家を建てるにしても、直接必要な室だけ建てればよいかと言ふに、決してそうではない。矢張り一見不必要なやうな、門もなければいけないし、庭園もなければならないのである。

又都市を建設するにしてもそうである。建物と街路があればそれでよいと言ふものではない。公園も必要であるし、街路樹も必要である。公園のやうなものは、今の時世に贅澤であるから掘返して馬鈴薯でも作れと言ふ議論も出ないとも限らない。

然しこれは非常時中の非常時の場合のみに言はれ得るところであつて、國も個人も如何なる場合にあつても、餘力を殘して置くことが必要である。人生の餘力を生ずる方法には、色々のことが考へられ得るのであるが、最も手近かで、簡易な方法はと言へば先づ煙草を樂しむがよいと考へ

る。喫煙によつて與へられる人生の餘裕と言ふものは決して馬鹿に出來ないものである。

然しその餘裕、その價値がどの程度のものであるかは別問題としても、私は喫煙による獨自の瞑想境の生れることのみでも、こんな有難い境地を味ふ方法は、煙草以外にそうあるとは考へられないのである。

異國の空の一人旅、晩餐の後にホテルのサルーンに出て、安樂椅子に身を托しながら、靜かに紫煙を立てつゝ、同じ宿に集つた各國各種の人々の思ひ〳〵に話し合ふ有樣や漫歩の姿を眺めだり、遠く思ひを故國に走せて居るうちに、明日の日程のことも、今日過ぎて來た跡さへ忘れ、果ては自分の現實の存在さへ、此一本の葉卷の煙の如く立ち消えそうになつて行くであらう、その時の心境こそは、實に何んとも言へぬ旅の情趣の泌み出る時である。

旅をする人の仕方は色々である。細かい旅の日程を作つて、朝から晩まで、足を棒にして名所舊跡を親の仇でも討つやうに探し歩く人もある。その日に觀たこと聽いたことは、ペンの續く限り細大洩さず手帖に書き込む人もある。又蒐集癖の人々は、出喰はした總てのものを記念として、トランクに詰め込むのである。やつと宿に入ると、先づその日の收穫の勘定に忙がしい。今日の見物は能率がどうであつたか、明日は今日の失敗を取返へさうとか、又もつと能率をよくしたい

とか、只管身體を勞し心を勞して、餘裕のない張りつめた旅行をする人々がある。

私の旅の仕方は、一切の窮屈な日程や、能率主義は避けて、悠々紫煙に踏晦することである。どちらがよいか惡いか、それを論ずることが既に旅の本意ではないのである。私は私の方法により、他の人々は十人十色として、それを尊重するの外はないのである。

獨房淨机の前に、端座しなくとも安樂椅子でも、ソファーでも、或は寢ころんで、一本の葉卷に火を點じ、立昇る紫煙の行方を眺めながら、無念無想に入るときに、邪念、雜念が霧の如く消散して、忽然として現れる眞の姿を認めることが出來ることがある。

日頃念じながら、又思を凝しながら、どうしても解決することの出來なかつた問題が、譯もなくその解決と打開の途を見出し得ることがある。禪の悟入と言ふか佛道の悟りに似たものが自然に生れるのである。

この環境を捉へ得ることが、即ち哲學者の哲學となり、教育家の教育となり、政治家の政治となり得るのであらうと考へる。彼の伊藤公の縱横無盡の國策も、野田大塊翁の大道無門の出入もこの葉卷の功德でなかつたと、誰が言ひ切り得るであらう。人間が山海の珍味を鱈腹詰め込んで、葡萄の美酒を夜光の杯で呑むだけ呑んだ後に、香りの高いハバナを一本口にすることは、蓋し愉

悅の極致と言ふべきであらう。

然しながら喫煙の眞の姿を求めず、又喫煙の必然性である餘裕を求めず、徒らに時をも所をも嫌ひなく、無意味に喫煙することは、正に煙草道の邪道であり、邪喫であると考へる。そこに道德觀念が生ずるのではないか。邪喫は衞生上から見ても害毒であり、經濟上からも不經濟である。と言ふ色々な問題が起つて來るのである。この邪道に入つた人々は、自らその弊害に懲りて、屢〻禁烟を斷行するのである。

この種の人はたとへ一度は禁烟しても又何かの機會で又元の愛烟家となり、又禁烟家となり、又愛烟家となり、常にこの二道の間を彷徨してゐるのが通例である。これはその人に道德觀念がなく、意志薄弱であることが原因をなしてゐる。更に大乘的に言へば煙草に淫してゐるからであると考へる。

私は世の愛烟家には須らく道德觀を持たせたいと思ふのである。又園藝趣味とか釣の趣味とかと言つた、高尙なる一つの趣味としての煙草を存在させたいと念ずるのである。それには先づ邪喫の習慣を廢めることである。そうして思索の益友として、又冥想の好伴侶として煙草を生かして行くことである。

喫烟の悪弊から開放されたならば、花卉蔬菜の栽培や、或は釣糸を垂れて魚を待つ心境と同じ淨樂を味ひ得ることゝ考へる。何故にこの煙草と言ふ、天の與へた、人類への美錄が初めから文化的人類に與へられないで、アメリカインディヤンに與へられたか。これは中々興味の深い問題である。

私が學校を創立して、二年目であつたと記憶する。一日一教授が氣色ばみながら、私に告げたのである。それは學生達が授業休みの十分間に、教室内で喫烟して、その煙が濛々として室内に立ち籠つてゐて實に不愉快であり、あれでは到底授業が出來ない。何んとかしなくてはならないと言ふことであつた。

この教授の申出には、一理も二理もあつたし、又教育の立場から嚴格に言へば直ちに矯正取締まるべきであつたのである。然し私は自分の場合から推測して、それほど學生が樂しんで喫つてゐる煙草を强制的に取り上げて了ふことは、何んとしても出來なかつた。

いや學生以上に煙草の好きな私が、學生の煙草に禁令を出すと言ふことは、寧ろ滑稽染みたことにも考へられたのである。そこで私は一つの妥協案を考へついたのである。

今後私は校門を一歩這入れば、煙草は絶對に口にしないことを約束する。その代り學生達も教

室内では煙草を喫まぬやうにして貰ひたいと言ふことである。私はこの約束をその時以來退任するまで正直に格守し得たことを、今日でも誇負してゐるところである。

私は斯く決心し、斯く約束はしたものゝ、當初は禁煙の校内生活は實に堪へられぬ苦痛であり一日の長いことを熟々味はされたのであつた。當時はまだ校用の自動車はなかつたので、私は外出に電車を利用してゐたのであつたが、校門を出ると、直ぐ煙草に火をつけて口にした。

終點から電車に乘つたのでは、煙草はそのまゝ喫ひ續けることが出來ないので、態々電車に乘らないで、煙草を喫みながら電車道を悠々と次の停留所、若くはその次の停留所まで歩くのが習慣であつた。

思へばこれも、過ぎた二十年の昔である。昔思へば懷かしいものである。この二十年の間には總ての物が變遷した。私自身も、私の周圍も變化した。その中でいつも昔と變らないものは私と煙草である。

煙草と私は長い親交である。長い間のことであるから、その間時に色々の經緯もあつたのであるが、この交友許りは過去現在未來を通じて、最も變りなき交渉を續けて行くものと考へる。

（一五・六）

病床閑話

私と煙草

その三

他家を訪問した場合、その應接間の卓上に、灰皿やマッチなどの煙草道具のない時ほど、寂莫を感ずるものはないのである。私はそんな場合の印象は、どうもこの家の主人夫妻は、嚴格なクリスチャンでもあらうか、或は又矯風會の役員でゝもあるのではないかなどゝ想像するのである。

これとは反對に、待つ應接間へその家の主人が、葉卷を燻しながら現れて來るやうな場合は、例へそれが初對面であらうとも、百年の知己の感がして、何か物を賴みに行つても、話をせぬ先から、こちらの希望はもう半分は聽いて貰へたやうな氣持ちになるのである。就中主人がマドロスパイプを口にしながら話をされるやうな時は、一層親しみを覺えるものである。この點から言ふと、バットか朝日などを喫はれるのでは、線が少し細過ぎる爲か、その受ける印象は、それほど強くないのも面白い對照である。

煙草に親しむ人は、どうしても親しみが湧き易いのが人情である。相當生活に餘裕のある人でも質素な又簡單な生活をして、酒にも煙草にも親しまぬと言ふ種類の人は、どうしたものか、ど

ことなく變人らしいところか、世捨人のやうな感じがしてならないし、又そんな人にはどことなく和やかさが缺けて、凄味が加へられてゐるものである。若しこの人が上層社會の人であり、支配階級の人であればあるほど、この感じが強いものである。

然しこれを、伊藤公や野田翁の場合に、あてはめて見ると、二人とも人から憎しみを受けたり、恐れられたりするやうな、暗い影はどこにも見出し得ないのである。ただ伊藤公の兇手に斃れたのは、その下手人が異人種であつたのと、その動機が全く個人の性格を除外した政治的の關係であつたからである。

更に他の一例を引用するならば若槻男がある。男は有名な酒豪であり、愛煙家である。若し男をして、適材適所を得せしむるならば一樽の蔬被りの前に座せしめ、酒杯とマドロスパイプを男の手に握らしむることである。あれほど問題となつた倫敦條約の責任者ではあるが、何の不祥事を生まなかつたのは、この男の風格が、最も大きい素因ではあるまいかと思ふのである。

これから見ると濱口氏や井上氏は、個人として實に立派な人々でありながら、共に非業の死を遂げるに至つたのは、この二人には酒杯もマドロスパイプもどうも似合はないと言ふことが、可成り重大な關聯を持つたのではないかと考へるのである。

朗らかさ、和やかさ、親しみと言つたものは、人生の華であると考へる。この華の咲かない人は、どこかに寂しさがあり、近づき難いものである。こんなことが個人的には最も大きい好惡感となつて現れるものであると考へる。斯かる人生の岐れ目は矢張り喫煙を持つか持たぬかに基礎付けられることも少くないと考へる。斯く考へて來ると、喫煙は立派な道德であると、言ひ切ることが出來るのである。

十年ほど前の話であるが、私は所用の爲に帝國ホテルに、數日間續いて出入してゐたことがある。その時晝食時には、食堂の或一定したテーブルに着く習慣であつたので、自然そのテーブルを持つてゐたボーイと懇意となつた。

私が食後に必ず葉卷きを取出して、喫ふのを見てゐたそのボーイは、話題を煙草にとつて、私と色々話合つたのであつたが、その時ボーイは、自分は葉卷き煙草についてゐるバンドを蒐集することに非常な趣味を持つてゐることを告げて、その蒐集品を一度見て戴きたいとのことであつた。

私はこの變つたボーイさんの趣味に少なからず興味を覺え、その蒐集帖を見ることを樂みにして待つてゐた。軈て大きいアルバムが私の手に渡された。長い年月に亘つて根氣よく蒐められた

ものであるだけに、あらゆる種類のバンドが手際よく貼り付けられてあつた。今までは無心に切つて、そのまゝ灰皿の中へ打ち棄てゝしまつた、あのバンドがこんな立派な趣味的價値を持つものだとは、始めて知つた新らしい分野であつた。

私はただ驚嘆と羨望の眼を見張つたのであつた。ボーイさんはその蒐集の祕訣を語つて、ホテルの食堂又は喫煙室で、外人が喫煙した後の掃除の時に集めるのであるが、一番書入れの時は、觀光團が大勢入り込んだ時で變つた種類が最もよく手に入ると言ふことであつた。

私はこの時以來、葉卷煙草のバンド蒐集に興味を持ち、又私の仕事として適當したことだと考へたので、機會ある毎にバンドを貯めて置いた。

ただ何よりも殘念に思ふことは、震災後に横濱稅關から讓り受けた煙草に就ては、その全部のバンドを逸して了つた事である。然しその後氣をつけて蒐集したものが、百種に餘るものがあり大分蒐めたつもりであるが、これを帝國ホテルのボーイさんの蒐集に比すれば、微々として言ふに足らぬのである。

私が大分蒐めた頃のことである。ホテルニューグラド社長野村洋三氏夫人美智子女史が、貴下は葉卷きのバンドを蒐集なさつていらつしやるそうであるが、成べく澤山戴きたいと言ふことで

あつた。私は、集まつてゐるだけを贈つたのであるが、その後時が經つて、夫人から一脚の飾卓子が贈り屆けられた。

その卓子は玄關に置くに適當なものであつたが、卓子の上には硝子が張られ、その下には私の蒐めたバンドを、美術的に組合せた、趣味豊かな藝術品であつた。

猶よく見ると、そのバンドの配置は、種類を分け模様を分け、形を分けて、それ等を巧みに配置した分類的綜合的の美しさを合せ表現してあつたのに、一層驚かされたのである。無心に捨てゝ了ふべきバンドを蒐集することを教へられ、更にこれを實用化し、藝術品化することを教へられて、私は物の利用價値の効果と人の注意力の効果に就て少なからず、實物教訓を得た次第である。

この記念すべき卓子は、今も猶私の家の玄關に置かれてあり、十數年を經てゐるが、そのバンドの色彩に少しの變色もなく、昔のまゝの姿である。私は野村夫人に深い感謝を表し、又帝國ホテルのボーイさんにも厚く御禮を言ひたいのである。恐らく私と煙草の因緣を物語る記念品として、永劫に傳へられるであらうことを私は信ずるものである。

（一五・七）

「はりがね」を讀む

頃日山口辰男君から其近著「はりがね」一卷を贈られた。この書は山口君が從軍三年生死の間を彷徨した血の體驗記である。「はりがね」と言ふ書名は山口君が青柳部隊の工兵中尉として有線通信隊を率いたところから出たものである。

山口君は横濱高工の應化第四回の出身である。この第四回の組は在學中から頗る異色のあつた組であり、私のやうな物覺えの惡い者にも、名簿を繰くとその一人々々の面影が眼前に髣髴として來るのである。山口君はこの組でも異彩ある一人であつたが、在學中に母校の高工時報の前身であるイオンを創刊して、同志と奔走したが、文筆には得意の者の少い工業學生の中にあつて光彩を放つたものである。山口君が今回の出版もこの文筆の才幹に負ふところ大であると考へる。

山口君が應召して、戰地にあり、日夜の行動を戰塵の暇に記錄したのが、いつの間にか二百枚綴のノートが六冊となつたそうである。このノートの表紙には「余の戰死せる時は本帳を遺族に屆けられたし」と朱書して常に背嚢の中に入れて置いた。この集積した貴重な記錄を歸還後整理

して第三回事變記念日に刊行したのである。

山口君の戰地に於ける任務は、電線電話の架設修理にあつたので、その部隊は常に極めて少數であり前進する部隊の後を追つて、後方部隊との連絡を計るのが主なる任務であつたやうである。從つて素人考へからすれば、餘り苦勞なものではないやうであるが事實は丸で反對である。

この書に序文した靑柳部隊長の一齣に見ると「百雷のやうな砲聲や怒濤のやうな喊聲、そうして戰鬪場裡とはおよそかけ離れた靜寂な犬ころ一匹通らぬ野原の中で、二人か三人の兵が數條のはりがねをたどり乍ら血眼になつて電柱に登りはりがねをつなぎなどして居る姿をよく見る。保線兵だ。よく便衣隊や土民などに狙はれるのも此の保線兵だ。時に有力な敵軍にひよつこり打突かるのもこの保線兵だ。

上官の指揮を受ける事も出來ぬ。友軍の姿も見當らぬ、いかにも華々しくない姿、それは保線兵だ。どう考へても、野原の中ではりがねを直してる姿などはニュース映畫や報道戰士の特種には凡そ緣が遠い事と首肯せられる。從つて彼等の姿が國民の前にクローズアップされる機會などはあり得ないのである」と書かれてゐる。

この間の勞苦と危險は、實に並大抵のことではないとは、山口君の手記によつて充分窺ひ得る

ところである。僅か三百米の前進の間に、二度も地雷に引つかゝつて人馬諸共吹き上げられたこともあり六人出た保線修理に二人が即死し二人が重傷した場合もあつた。

數々の危ない瀬戸際を、天祐にも山口君は微傷すらせず無事任務を果し得たのは、どう考へても神佛の加護によるものとしか思はれない。山口君は然し單に他力本願でもつて神佛の加護を願つた譯ではない。生死を超越したその精神力によつて、鬼神も道を避けたものかと思はれる。その一つの例證として大別山を背景に書かれた「針金に生きる」の項を摘記して見たい。

「私は茫然として了つた。一昨日そして昨日と修理したばかりの電線路が又三粁程にも亘つて滅茶苦茶に破壞されてゐるのである。根こそぎにされて、そして寸斷されてゐる電柱、叩き壞されてゐる碍子、持ち去られた電線、壞す直す壞す直すのいたちごつこも今日で三日の連續である。所でこの大きい障碍を直すには、私達はあまりにも小人數である。長以下六名である。

然しこの場合は直せるか直せないかと言つてゐる時ではない。直してしまはなければならないのである。出來るか出來ないかではなくて、やつて了はねばならないのが、戰爭のイデオロギーなのである。たとへ六人が三人でも、一人でも居る限り、否たとへ死んで了つたとしても直さなくてはならないのである。

六人での作業は何んとしても捗らない。生憎と三日前に雨が降つたので、後方の主力のゐる所に應援を頼んだ所でとても間に合はない。然しいくら捗らなくても夕方までに出來上りさうである。各自が八面六臂の働きを餘儀なくしなければならない。あと五百米、四百米、私達は愈々元氣づいて直して行く、あと三百米、二百米、百米然し私達は何と不運なのだらうかあと百米と言ふ所で用意して來た電線を費ひ切つて了つたのである。

幸なことには部落の近くに來てゐたので、部落へ入つて出來るだけ金屬線類を集めて繼ぎ合せれば、何とかなるでせうと高地軍曹が云ひ出した。私達は眞赤に錆びて曲げれば折れて了ひさうな二三米の針金、土瓶のつる、盥のたが、垣根の針金、物干用の針金、便器のたが迄ありと有ゆる金屬線を集めた。これを丹念に繼いだ。手袋は裂け、指は傷だらけとなつたが、斯くしてつぎはぎの雜巾線が相當長く出來上つた。しかし、又しかしであるが、あとたつた十米足らない。

私は悶躁いた。かきむしるやうに悶躁いた。あと十米、たつた十米の線が無いとは何とも殘念である。そうだ私達は銃を持つてゐた。四挺ある。この銃身を接げばあとは五米だ。『補給のつく二時間位なら人體を使つて見ませう』と神保上等兵が言ふ。五米なら二人で手をつなげば足りる。よしツ人體を使ふことにしよう。電話機の發電機は最高七十五ヴォルト位である。相當ビリ

ビリと來るが死にはしない」

そこで三人の兵が手を繼いで電線代用をした悲壯な物語が、山口君の犀利な筆致で寫し出されてゐる。雜巾線とは言ひ得て妙であり笑ふに笑はれぬユーモアの場面でもある。特に胸を打たれたのは山口君が死を前にしての僞らざる告白である。それは徐州作戰の間近の或日の出來事であつた。小淵集と言ふ部落へトラックに乘つて這入らうとする手前で山口君は敵狀を視察する爲に單身城壁に近づいたのであつた。

「隊長殿がゐないと何だか心細い樣で、それに隊長一人では危險ですから」と言譯けをしながら私の傍へ來て自動車のドアを開けた。私がステップに足をかけて飛び乘つたその瞬間「ダダダダ」と目の前五十米位の城門の右側の土壁から重機が火を吹き出した。「車を止めろ」と言ふより早く次のダダダダが聞えるのと自動車の硝子が壞れるのとウーンと運轉手が私の方に倒れて來たのとは全く同時だつた。「皆んな畑へ這入れ！」と後を見るともう皆んな下りて了つたらしく影はなかつた。急いで運轉手を引きずり下して傍の麥畑の中へ轉がる樣にもぐり込んだ。

「急に明るくなつたのでその方を見ると、トラックに積んであつたガソリンのドラム罐に彈が當つたらしく素晴らしく派手に火焰を吹き上げてゐるのだ。この時の私の心境は自分でもあとで不

思議に思はれる位冷靜になりきつてゐた。一番初めに出來た考へはよし死んでやらうと言ふのであつた。そうしてよしこれで俺ははつきり死んだのだと意識して死にたいと思つた。女房の顏が、子供たちの顏が、おふくろの顏がみんなの顏が、そうして私の半生の色々の事共がくる〳〵と頭の中をめぐり出して來た。」

山口君はそれから拳銃の彈丸を調べ、一發を自決用に殘すことに決めた。それから書類や地圖を細かに千切つて、手の指で穴を掘つて埋め、横になつたまゝ水筒の水を飲んで小便をした。この時の描寫を生々しく書いた「銃口前」の一篇は全く讀者をして息詰まる劇的なものを感ぜしめるのである。

山口君の名文は全篇を埋めてゐるが「針金に死ぬ」の篇に「急にあたりが明るくなつたと思ふと大北望の北寄りの斜面から眞紅なそれは〳〵眞紅な太陽が首を出し始めた。そしてその太陽の眞下の丘の稜線の上を日の丸が這ひ上つて行くのが見える。その一人一人が神樣のやうに見える。さうだ。私達は靖國の神々を現實に見てゐるのである。私達は感極まつて誰もが萬歳を叫びたい樣な表情である。誰だか分らないが太陽の方に向つて最敬禮をやつた。そうすると、誰も彼も誰が號令するでもないが皆敬禮を始めた。私達にはもう太陽が天體の一つであると言つたやうな氣

持ちは丸つきり無くなつて、唯、何か貴い、嚴かなやうな物に見えたのである。全く自然に頭が下つて來た。今迄別にお日樣を拜むやうな習慣を持つてゐない私でも、ただ自然に頭が下つて來たのである。」といみじくも書き記してある。

又「張八嶺」のうちに春の訪れを叙してある「もう津浦線にも春がめぐつて來て、プラットホームのポプラやアカシヤの裸身にも何んとなく朋黄の匂ひが感ぜられ驛舍をぐるりとまいてゐる枳の生垣の大きな刺の間々にも若い芽の呼吸のしてゐるのが見られて來た。入口際に杏子の一本があり紅い蕾は暖かい日射しを待つてゐる。戰地ではあり、戰場ではあるが、そして今はあつても一秒の後の命の保證は誰もしても吳れない私達の現在であつても、ぽか〳〵と靴の鋲越しに感じて來る春の跫音には、何だか大きな希望のやうなものが湧いて來るのを感じるのである。先日まで褐一色だつた野面がもう青一色に變らんとしつゝある、何か身内の中にも外にも躍動するやうな空氣が感じられる」とある。確かに春の色が文中に躍動してゐる。

山口君はその名文と化學者としての鋭利な感覺と深い思索をよりまぜて、全篇に評價高く縱深い主觀的な作品となつて表現せられてゐる。勿論山口君の人柄から言へばこれでよい譯であるがただ慾を言へば所謂落陽の紙價を高からしめてゐる戰爭文學のやうに客觀描寫に主點を置いたな

らば、大衆的には更により廣い拍手で迎へられたのではなからうかとも考へられる。

然し又見方によつては、高級な香高き戰爭文學としての地歩を獨占するものとしての誇を持つことが、更に一層の意義あらしむるものとも言ひ得るのである。いづれにしてもこの「はりがね」は過去現在將來を通じて、戰爭文學中の白眉であることを自信し、敢て校友諸子の一讀を勸むる所以である。

（一五・一〇）

梅北製作所を語る

梅北兼吉君は機械工學科第三期の出身者である。大森驛の近くに梅北製作所を經營して居る。尨大なる日立製作所と道路を隔てゝ對峙して居るとは云ひながら、此方は至つて小規模な小じんまりとした工場である。

去る十一日（十一月）私は梅北君の招きに應じて此工場を參觀した。此日梅北君は鹿兒島縣の鄉里にある梅北神社を分社して工場内の一角に社殿を造營し神官を招請して遷宮式を擧行した。梅北君の祖先は薩摩では島津家よりも舊き由緒ある家柄で日本歷史にも其行跡が殘されて居る。

今や其祖先の神靈を己が經營する工場内に奉迎せられた事は實に奇特の行爲と云ふべく神明の加護必至と信ずる。

又梅北君は鹿兒島市の鍛冶屋町に生れた、場末の小さな町ではあるが、南遊の旅客の必ず訪れる處で、人をして低徊去る能はざらしむるものがある。即ち西郷、大久保、東郷等の我國元勳の生誕地である爲である。

その樣に因緣のある爲、候爵西郷從德翁は老體にもかゝわらず此の遷宮式に親しく來臨せられた。西郷候爵は蘇峰先生を介し幾年か前より私が能く承知して居つたので、梅北君も多少意外に感ぜられたらしい。

此日又從業徒弟の爲に設けられた寄宿舍の新築祝も兼ね行はれたので、私は從事員二十幾名の爲に一場の講話をして辭去した。

梅北製作所は精密測定計器の製造所である。其製作の重なる種目は航空機用、車輛用、發動機用、タービン用等の加速度計、振動計等にして精密機械中でも一層精密を要する計器である。

記臆の惡い私は梅北君を能く知らなかつた、處が十一月の某日梅北君夫妻は私を山の上に訪ねて來た。其際梅北製作所の經營につき具さに物語られた、特に年少の徒弟を寄宿舍に收容して自

分等の子の様に思つて、面倒を見つゝある精神的方面に就ての夫妻の心構へや信念を吐露せられて私を感激せしめた。其れが私が梅北製作所を訪ひ、且又從業者一同へ一場の談話を試みた所以である。

工場は一瞥しただけで素人の私にも精密機械の工作場であることは能く分かる。しかし何物よりも私を感銘せしめたものは從業員の實に能く落ち着いた態度であつた。成る程梅北君夫妻の精神的努力の影響であると私の心に明朗なる感じを起さしめた。精巧なる計器は此の落ち着いた態度でなければ優秀なものが作れまい。

私はまだ充分梅北製作所の經營に關する內容は知らないが、其組織は昔の職人氣質の徒弟制度が多分にあると思はれる。家內工業や小工業には此れが國情に即した理想的のものかと思ふが、大工業や大量生產の勃興と共に此徒弟制度が消えて行くのが現時の狀勢であるかに見える。併し特長のある經營者と事業の種類に依つては、あながち左樣でもないであらう。

梅北製作所の製品は最も熟練した技術を要し且つ多大の手數を要する點から考へて、我國固有の美術工藝品に類似の點のある處から推して、徒弟制度が相應しく感ぜられる。而して此を誘拔するに梅北君の努力ありとせば、必ず發展するものと信ずる。

自分の仕事の爲に身命を打ち込み、月給やボーナスに目をくれず、自分の作つた製品に無限の誇を持つことは我國固有の藝術家氣質である。其製品に自己の魂魄を宿して居るのである。梅北製作所の製品にその様な卓越したものが出來る將來を待望いたします。　（一五・一二）

老婆心

我々の母校も創立してから二十年餘を經過した。卒業生も無量三千名に垂んとして居る。支那事變以來、工業の進展は益々急で、隨つて工業從事の技術家の必要が、日に月に倍加して感ぜらるゝに至つた。幾年か以前の就職難の聲が消え失せて、全く夢を見る様な世の中となつた。

三月の卒業期が待ち遠しいとて、くり上げて前年の十二月に、卒業生を輩出することにしたことがあつた。月足らずの兒を產ました。

それでもまだ間に合はないとて、產めよ殖やせの宣傳の浪に乘つて、雙兒を產む方法を案出した。即ち設備や其他を其儘にして二倍の學生を收容するにした。親である校長や、養育掛りの諸先生の苦勞は察するに餘りあることである。

それでも子供は健全に生育し、潑剌たる前途を約束する樣に見えるのが、實に嬉しい。此が所謂時代の動きである。事變の雰圍氣が然らしむるものであらう。衣食足つて何不足なく教育せられたからとて、必しも俊髦英才が生ずる譯でない。寧ろ困弊飢餓や、盤根錯節が人の子を玉にすることは、古今の通例であるのである。何と云つても環境とか、雰圍氣とか云ふものは偉大なる力を有するものである。

明治の時代に於ては、大學さへ卒業すれば、大した社會的地位が既に獲得せられたかの樣に考へられ、世間も又その樣に尊重して居つた。隨て青年自身の矜恃する處が高く、滿々たる青雲の覇氣を藏して、其前途は所謂春の海を思はしめた。

今は事情がちがつて來た。幾年か以前には高工の出身者にも、悲慘な就職難の風が吹き荒んだ。氣の早い校長連の內には、高工の整理をさへ考へた人迄もあつた。其當時卒業生を依賴する人が來ると、人買ひが來たと云つたものである。隨つて卒業生が賣れたとか賣れ殘つたとか云ふことは、全く普通の言葉となつた。此れは一面には敎育の墮落と見るべきであらう。

此の樣な雰圍氣の裡に育つた學生には、其品位に影響する處なくてはやまない。學生は自尊心を失ひ、矜恃がなくなつた。無理ならぬ事である。商品として取扱はれてゐたからである。失は

れた品位は容易に回復は出來難い。其餘弊は就職難を突破して、離職難と云ふ有卦に入つた今日でも猶殘つて居る。

小學から中等學校、それから高等專門學校、それから大學へと、各自の才能と德器を磨き、將來大成の基調を作つて、社會に出で國家の爲に飛躍し、大貢獻を爲す機會を把握し得る環境が學校に於て彼等に與へられてゐるや否や、頗る疑問である。

學問は進步した、普及した。インテリが多くなつた。又其程度も高くなつたことは、どの方面を見ても明々白々の事實である。併し政治にしても、經濟にしても、教育にしても、大局に明かな士に乏しい。信念に徹底する士が少ない。其實例は我國の各方面、各部門に氾濫して居るが、遺憾ながら、之を列擧することを遠慮する。之を宿弊と云ひ得るならば、明治以來の教育が之を增長せしめたものであらう。

世間の多くの人は、教育の弊所はよく認識して居る、歷代の政府當局も又之を認識して居る。爲に教育の改善が絕えず計畫されて居るが、まだ其成案が得られない。

假令其成案が得られても、所期の目的が果して達せらるゝや否や、之れ又疑問である。なぜかと云へば、教育の改善は專ら學校の系統とか、年限とか、連絡とか、教科目とか云ふ、制度の問

題に限定せらるゝからである。

弘陵の出身者は如何に頑張つても、社會の此の雰圍氣には勝てまい。時代を超越するだけの達識が必要であるからである。思無邪の誠を把握して居らなければならぬからである。名教自然の眞諦に達せなければならぬからである。ぼんくらは大學へ行けと云ふ言葉の含蓄に悟道せねばならぬからである。

山の上から谷の底を見ると、瓜や茄子の花盛り位ではない、百花撩亂の陽春が見える。三千に近い喬木灌木が、春光に浴し慈雨に濕ひ、旺盛なる生育繁茂をなしつゝある。やがては深山大澤を作り、其中に龍蛇の生ずるものがあらう。

戰亂は工業の異常の發達と繁榮をもたらした。我工業會員の得意や想ひ知るべきである。併し國家の禍福も人間個人の禍福も測り知るべからざるものがある。

二十年前の英佛と獨逸とを考へて見れば所謂思ひ半ばに過ぐるものがあらう。六七年前の我工業會員と今とを比較して見ても、同樣の感じがあらう。併し得意必ずしも得意ならず、失意必ずしも失意ならずである。

得意の諸君よ、十歩進まば三歩退いて先づ考へよ、猶七歩を前進して居るのである。決して順

風に誘はれて、十二歩と無理な二歩をかち得てはならない。破滅は往々にして其二歩から來るものである。

神ならぬ我々は未來の事は分らない、明日の事さへ分らぬ。只我々が今まで踏み來つた經驗と、我々祖先の殘した歴史に照されて、勇往邁進するのである。自分の携へて居る燈火で自分の足下許りを照らして居つては、遠方の見すかしが利く道理がない。

順風に帆を上げて快走して居る得意の諸君に一片の老婆心を寄せた積りである。

（一六・四）

事實は小説より奇し

この夏の頃英字新聞アドヴアタイザー紙は興味ある或る消息を傳へた。しかし多くの讀者には何等關心事でなかつたかも知れない。

キネーと云へば、我々國民の或方面では、能く知られた外國人である、新聞人として東洋の各方面で活動し、晩年滿鐵の顧問などを勤め、ゼネバの國際聯盟大會には松岡全權に隨行した。何

事にも日本最貧者として、世界的にも能く知られて居た人物である。

處がいつの間にか復雜怪奇の國際場裡、特に世界の視線を集めた極東の天地から、忽然其姿をかくして、消息不明となつた。處で最近彼の知人であり、且つ現在北京で國際通信の元締をして居るゲッテーと云ふ人にその消息を洩らして來た。

キネーの落ち行きし先きは、太洋洲中ソサイエチ群島中の一孤島であつた、此處に彼は僅かの田園を購めて、自給自足の生活を始めて既に兩三年を經過した。晝は椰子の木蔭に勞を休め、夜はバンガローの月に葉卷の紫煙をあげて、全く隱遁の生活に入つた。

時には附近の町に足を運んで、町人の讀み古した新聞、雜誌に眼をとめて、世界のニュースに今更の樣に無量の感慨を催すこともあつた。

處が此頃島に傳はる風の便によつて、隣の孤島に更に一外人が風來して、同じ田園生活を營み初めたことを耳にした。此噂はキネーの好奇心を多分にそゝり立てた。

新聞人として昔取つた杵柄、なんで其噂を聞き流さう。彼は得意の獨木舟を操つて、十哩を隔てた噂の島へ漕ぎ付けた。

處が思ひがけなくも噂の外人は、彼が永年好敵手として、極東の天地で互に鎬を削つて戰つた

ドナルド其人であつた。如何にも皮肉極まる奇遇であつたと云はねばなるまい。

ドナルドと云へば我々邦人には、キネーよりも寧ろより多く知られて居る外人である。彼は濠洲生れの英人で東洋に來て初めは新聞記者として働き、孫逸仙の秘書となり、支那政府の財政顧問となり、張作霖爆死後には張學良に聘せられて顧問として働き、最後に蔣介石の側近に馳せ、かの有名な西安事件で蔣介石の運命が急を告ぐる時、宋美齡と同乘して、その救出しに西安に飛行したことは周知の事である。全く我々の憎まれ者としての存在であつた。

ドナルドは如何なることが起きても、事苟くも日本と支那に關係する限り、支那側に立つて辯護し、說明し、宣傳した。キネーとは全く對蹠的の存在であつた。

流石のドナルドも寄る年波と、急變する國際狀勢に押されて、終に泥足を洗つて支那を引き上げたものと見える。一說には近年彼は若き一支那婦人を近づけ、宋美齡の逆鱗に觸れ放逐せられたのであると、支那退去に當り彼と同船した一邦人に依つて傳へられて居る。眞僞は保證の限りでない。

現下は世界の大混亂時代である。幾百萬と云ふ戰士は歐洲の天地でも、東亞の天地でも物凄い修羅場を展開して居る。東亞に關する限り、彼等兩人は應分の制前を持つて居ることは何人も認

めるであらう。拂ひ込んだ株數は幾株であつたとしても、兎に角彼等兩人は、あつさり棄權して去つて行つた。

今頃は彼等兩人は、極東に展開しつゝある復雜微妙の國際外交に、思を寄せて脾肉の嘆をなして居るか、抑も又一衣帶水の海をはさんで昔と變らぬ日本最負、支那最負の焰を燃して居るか知るすべもない。

恐らくは彼等兩人は、絕海の孤島に、過去の凡てを忘れて、行雲流水、天地自然に抱擁せられ和敬清寂の三昧に其晩年を送つて居るのではないかと思はれる。

我松井將軍が支那事變の當初、國民の最大關心を集めた中支攻略戰より歸還するや、戎衣を脫ぎ棄てゝ、熱海伊豆山附近の海岸に、興亞觀音を願立し、又其寺畔に居を卜し、朝夕日支兩國の戰歿將士の菩提を弔つて居られる。又近い內に大陸に渡つて、風猶腥さき新戰場に英靈を弔慰するとのことである。私はかつて興亞觀音に參詣し、將軍の寓居に刺を通じ、低徊去るに忍びざるものがあつた。

こんな場面にお鯉さんと云ふ女性を引き出すのは何如かと思ふが、一寸ご免を蒙ります。お鯉と云へば、明治の末に近いころ藝妓として、又桂公の寵姜として、其嬌名を知らないものがなか

つた程、世間を賑やかしたものであつた。

彼女の告白として、公にせられたお鯉物語は、當時の花柳界の內幕は申すに及ばず、明治の政界から財界の機微にまで及んで曝露して居る。豪奢な生活、數奇な環境、あらゆる浮沈榮辱の限りを盡くした窮極のお鯉は、まだ色香の褪せぬ綠の髮を惜しげもなく斷ち切つて佛門に入つた。

三軍を叱咤する名將も、國際場裡の策士も、一代の傾國も、過去を抛擲して悟道すれば、何れも異曲同巧を辿り行くものと見える。

此等の人々は、各自の舞臺で能く躍り、能く舞ひ、能く歌つた所謂千兩役者で、又其舞臺は檜舞臺であつた。馬の脚であらうと、旅役者であらうと、何であらうと、我々お互は社會と云ふ舞臺で活動する役者には相違ない。悲しいこと、喜ぶこと、泣くこと、笑ふこと、愛すること、憎むこと、喧嘩すること、戰ふこと、等々は人間の所作で、芝居と云ふものは、畢竟人間の眞似ごとをして見せて居るのに過ぎない。

人間の眞似ごとをする芝居を見物する位、考へ方によつては馬鹿げた事はあるまい。高い木戸錢を拂つて、人間の眞似事を見物するよりは、自分自身で思ふ存分芝居を打つて見る方が、どれだけ壯快で、又內容が充實してるかも知れない。

千兩役者は美しい感じがせられる。假令馬の脚でも思ふ存分、心の行く許り、人間芝居を打つて見る事が、人生の本分でなからうか。

事實は小說よりも奇しと云ふことがある。實際其通りであらうと思ふ。小說よりも奇しき、芝居を打つた人が、過去の凡てを雲煙過眼に付し、去つて復た念はず、又秋毫の未練を殘さゞるは、其前半の美醜は問はず、實に敬意を拂ふべきである。

人の將に死なんとするや、其言や善しと云ふことがある。死期を待つことなく、思ふ存分人間芝居を打ち續け、忽然と幕を下ろして終止符を打つ。成敗利鈍は天の運で、問ふには及ぶまい。其行や善しと云はざるを得ない。宜しく手を拍つて嘆美の聲を贈るべきである。

キネー、ドナルドは共に西洋人である。而して其蹈海の心術、光風霽月の態度は共に、我東洋より學びたるものであらう。

一生の大半を東洋に捧げ、しかも同じコースを走り、期せずして共に絕海の孤島に隱る、實に小說より奇しき事實である。

彼等の赤裸の告白が、異日回想錄となつて世に表はれるのを待つ。

（一六・九）